

概

況

平成二十九年(二〇一七)の歌舞伎界

小玉祥子

初舞台と襲名があり、新作の上演も多く行われた。

歌舞伎座の一月は「初春大歌舞伎」。「將軍江戸を去る」は染五郎の徳川慶喜と愛之助の山岡鉄太郎による緊迫した台詞劇。「大津絵道成寺」は愛之助の五変化。「沼津」は吉右衛門の十兵衛と歌六の平作の息が合った。「井伊大老」は幸四郎の井伊直弼、玉三郎のお静の方、雀右衛門の昌子の方、歌六の仙英禪師と顔揃い。「越後獅子」が鷹之資、「傾城」が玉三郎、「松浦の太鼓」は染五郎の松浦鎮信、愛之助の大高源吉、左團次の其角。

二月は「猿若祭二月大歌舞伎」。「勘九郎の長男が三代目勘太郎、次男が二代目長三郎を襲名し、初舞台。「猿若江戸の初櫓」に続き、「大商蛭子島」は久々の上演で、松緑、勘九郎、七之助、時蔵。「四千両」は菊五郎の富蔵、梅玉の藤岡藤十郎。「扇獅子」は梅玉と雀右衛門。「門出二人桃太郎」が初舞台披露演目。勘太郎、長三郎の桃太郎を時蔵のお婆さん、芝翫のおじいさん、染五郎の大彦、松緑の猿彦、菊之助の雉彦、勘九郎の息子勘作、七之助の嫁お鶴が囲み、菊五郎、梅玉、魁春、雀右衛門も出演する豪華さ。「太功記十段目」は芝翫の光

秀、魁春の操、秀太郎の皐月、孝太郎の初菊、鴈治郎の十次郎。「梅ごよみ」は染五郎の丹次郎、菊之助の仇吉、勘九郎の米八、児太郎のお蝶。

三月は「三月大歌舞伎」。「明君行状記」は梅玉の池田光政、亀三郎の青地善左衛門が台詞主体の心理劇に緊迫感を出した。「義経千本桜 渡海屋・大物浦」は仁左衛門が銀平から平知盛への変化を鮮やかに示し、時蔵の典侍の局に品格。「どんつく」は三津五郎三回忌追善。巳之助がユーモラスに見せた。「引窓」は幸四郎の南与兵衛、彌十郎の濡髪、魁春のお早。幸四郎が情と義務の間で揺れる思いを出した。「けいせい浜真砂」は藤十郎の真砂路、仁左衛門の久吉。「助六由縁江戸桜」は海老蔵の助六で、揚巻の雀右衛門に包みこむ大きな。菊五郎の白酒亮。

四月は「四月大歌舞伎」。「醍醐の花見」は鴈治郎ら。「伊勢音頭」は「追駈け」から「奥庭」まで。染五郎の貢が前半に柔らかなさを出した。梅枝のお紺、秀太郎の万次郎、猿之助の万野、松也の喜助と揃った。「熊谷陣屋」は幸四郎の熊谷が武将と情の間で揺れる思いを出した。猿之助の相模、高麗蔵の藤の方、染五郎

の義経。「傾城反魂香」は吉右衛門の又平、菊之助のおとく。芸術家の苦悩と夫婦の機微を表現。「帯屋」は藤十郎の長右衛門。沓太郎がお半を愛らしく、長吉をユーモラスに見せた。「奴道成寺」は猿之助。

五月は「團菊祭五月大歌舞伎」。「七世梅幸二十回忌、十七世羽左衛門十七回忌追善。八代目彦三郎の初代楽善、五代目亀三郎の九代目彦三郎、亀寿の三代目(坂東)亀蔵襲名披露。昼の襲名演目の「石切梶原」では彦三郎が梶原を颯爽と見せた。楽善の大庭、団蔵の六郎太夫、尾上右近の梢。「吉野山」は海老蔵の忠信、菊之助の静御前。「魚屋宗五郎」は菊五郎の宗五郎の演技の流れが鮮やか。時蔵のおはま、団蔵の太兵衛、権十郎の三吉、梅枝のおなぎと揃った。菊五郎の孫、寺嶋眞秀が酒屋の丁稚で初お目見得。夜の襲名演目の「対面」は彦三郎の荒事らしい勢いのある五郎、品位ある時蔵の十郎。菊五郎の工藤、楽善の朝比奈、萬次郎の大磯の虎、坂東亀蔵の近江。彦三郎の長男が鬼王家臣亀丸で亀三郎を襲名し、初舞台。「伽羅先代萩」は菊之助の政岡が気の張った様子を見せた。歌六の八汐、海老蔵の仁木、梅玉の勝元。「弥生の花浅草祭」は

松緑が武内宿禰、悪玉、国侍、獅子の精、新・亀蔵が神功皇后、善玉、通人、獅子の精を踊り抜き、息の合ったところを見せた。

六月は「六月大歌舞伎」。「名月八幡祭」は松緑の新助が純朴さと狂気に走る不気味さを見せた。笑也の美代吉。「浮世風呂」は猿之助の三助、種之助のなめくじ。「弁慶上使」は吉右衛門の弁慶に強さと哀しみ、雀右衛門のおわさに情。米吉のしのぶ、又五郎の侍従太郎、高麗蔵の花の井。「鎌倉三代記」は幸四郎が藤三郎で軽妙さ、高綱で勇壮さを出し、雀右衛門の時姫が一途。松也の三浦之助に瑞々しさ。秀太郎の長門。「御所五郎蔵」は仁左衛門の五郎蔵が颯爽とし、雀右衛門の皐月が悲しみを見せた。左團次の土右衛門、米吉の逢州。「一本刀土俵入」は幸四郎の茂兵衛が前後半を演じ分けた。猿之助のお蔭があだつばい。七月は「七月大歌舞伎」。「矢の根」は右團次の五郎、「加賀鳶」は「木戸前勢揃い」から「赤門捕物」まで。海老蔵の道玄、中車の松蔵。お兼で右之助が二代目齊入を襲名。「連獅子」は海老蔵の狂言師右近後に親獅子の精、巳之助の狂言師左近後に仔獅子の精。「駄右衛門花御所異聞」は「秋葉権現廻船語」が素材。海老蔵の日本駄右衛門、幸兵衛、秋葉大権現の三役、中車の玉島逸当、児太郎のお才。

八月は三部制の「八月納涼歌舞伎」。「刺青奇偶」は玉三郎・石川耕士演出。中車の半太郎、七之助のお仲。七之助の変化がうまく、

中車の台詞が良かった。染五郎の政五郎。「玉兔」は勘太郎、「団子売」は猿之助と勘九郎。「修禪寺物語」は彌十郎の夜叉王、猿之助の桂、勘九郎の頼家。「東海道中膝栗毛」歌舞伎座捕物帖」は染五郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八。「野田版 桜の森の満開の下」は野田秀樹作・演出の新作歌舞伎。七之助の夜長姫が台詞のメリハリが利いた。勘九郎の耳男 染五郎のオオアマ、猿弥のマナコ。

九月は「秀山祭九月大歌舞伎」。「毛谷村」は染五郎の六助、菊之助のお園。「道行旅路の嫁入」は藤十郎の戸無瀬、吉太郎の小浪。「幡随長兵衛」は吉右衛門の長兵衛に大きさと悲愴美があつた。魁春のお時、染五郎の水野。「逆櫓」は吉右衛門の松右衛門実は樋口次郎が変化を出した。歌六の権四郎が一本気さを見せた。東蔵のおよし、雀右衛門のお筆。「再桜遇清水」は吉右衛門による松貫四名義の作。染五郎が清玄と奴浪平の二役。雀右衛門の桜姫。おもしろい作品に仕上がった。

十月が「芸術祭十月大歌舞伎」。新作歌舞伎の「極付印度伝 マハーバーラタ戦記」(青木豪脚本、宮城聰演出)はインドの叙事詩が題材の新作。菊之助の迦楼奈、松也の阿龍樹雷を軸にした神と人の入り混じった物語。七之助の鶴妖朶姫が悪の魅力を発散。「杵手鳥狐城落月」は玉三郎の淀君。「漢人韓文手管始」は鴈治郎の伝七、芝翫の典蔵、七之助の高尾太夫。鴈治郎が典蔵の豹変に戸惑う姿をうま

く見せ、芝翫は怒りによる心情の変化を出した。「秋の色種」は玉三郎、梅枝、児太郎。

十一月が「吉例顔見世大歌舞伎」。大幹部があたり役を演じた見応えある興行。「鯉つかみ」は染五郎の鯉の精と若侍。「奥州安達原環宮明御殿」は吉右衛門の貞任、雀右衛門の袖萩、又五郎の宗任。歌六の平倭仗。吉右衛門が貞任の心情の変化を見せ、雀右衛門が哀れさを出した。「直侍」は菊五郎の直次郎、時蔵の三千歳、東蔵の丈賀、団蔵の丑松。端々まで神経の行き届いた一幕。「忠臣蔵五、六段目」は仁左衛門の勘平、孝太郎のおかる。仁左衛門が最後に連判に加えられる喜びを表現。「新口村」は藤十郎の忠兵衛、扇雀の梅川、歌六の孫右衛門。歌六が息子への思いを感じさせた。「大石最後の一日」は幸四郎の内蔵助、染五郎の磯貝、児太郎のおみの。幸四郎の舞台ぶりが大きい。

十二月は三部制の「十二月大歌舞伎」。「実盛物語」は愛之助の実盛に華があり、片岡亀蔵の瀬尾が好演。門之助の小方。「土蜘蛛は松緑の僧智壽実」は土蜘蛛の精で前シテに不気味さ。「らくだ」は愛之助のやたけたの熊五郎と中車の久六の息が合い、片岡亀蔵のらくだの字之助が絶妙な動き。家主夫婦の橘太郎と松之助の取り合わせが良かった。「蘭平物狂」は松緑の蘭平。長男の左近が繁蔵で親子の情が出た。「臉の母」は玉三郎のおはま、中車の忠太郎。中車が母への思いと拒絶された悲しみ

を見せた。玉三郎が心の揺れを細やかに描きだした。「楊貴妃」は玉三郎の楊貴妃。

国立劇場は一月が「しらぬい譚」。幕末から明治にかけての人氣小説が題材で原作から新たに脚本を起こした。菊五郎の鳥山豊後之助、時蔵の秋篠、松緑の秋作、菊之助の若菜姫。

三月が「伊賀越道中双六」。二〇一五年に同劇場で上演し、評判を取った演目をほぼ同じ配役で再演。吉右衛門の唐木政右衛門、歌六の幸兵衛、雀右衛門のお谷、菊之助の志津馬、又五郎の佐々木丹右衛門と助平。「岡崎」に見応え。

六月が「歌舞伎鑑賞教室」で「毛拔」。錦之助の衆寺弾正。「歌舞伎のみかた」は隼人。

七月が「歌舞伎鑑賞教室」で「一條大藏譚」。菊之助の大藏卿、梅枝の常盤御前。「歌舞伎のみかた」は坂東亀藏。

十月が「靈驗亀山鉾」。鶴屋南北作品の通し上演。仁左衛門が水右衛門と八郎兵衛の二役で悪の魅力を発散。雀右衛門のおつま、孝太郎のおまつ、錦之助の源之丞。

十一月が「坂崎出羽守」「杏掛時次郎」の新歌舞伎の二本立て。「坂崎」は松緑の坂崎出羽守、梅枝の千姫、坂東亀藏の本多平八郎、梅玉の徳川家康。松緑が出羽守の懊悩を見せた。「杏掛」は梅玉の時次郎、魁春のおきぬ。梅玉がクールさの底に熱情を秘めた役作り。

十二月が「今様三番三」「隅田春妓女容性」「御存梅の由兵衛」。「三番三」は雀右衛門の曾

我二の宮実は如月姫。「梅の由兵衛」は吉右衛門の由兵衛、菊之助の小梅と長吉の二役、雀右衛門の小三、錦之助の金五郎、歌六の源兵衛、又五郎のどびく。久々の上演だが、おもしろい舞台に仕上がった。

新橋演舞場の一月は「壽新春大歌舞伎」。市川右近が三代目右團次を襲名し、長男が二代目右近を名乗り、初舞台。「雙生隅田川」は右團次の猿島惣太後に七郎天狗と奴軍介、猿之助の班女御前、中車の大江匡房、海老蔵の梶権正武国。「三代猿之助四十八撰」の演目で右團次が右團次家の家の芸である「鯉つかみ」を見せた。「義賢最期」は海老蔵の義賢、中車の折平実是多田蔵人、笑三郎の小方。「口上」。「鉸引」は右團次の順礼七兵衛実は悪七兵衛景清、梅玉の虚無僧次郎蔵実とは三保谷四郎。「黒塚」は猿之助の老女岩手実とは安達原の鬼女、右團次の阿闍梨祐慶。

十、十一月はスーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」。主演の猿之助が公演中の事故で休演となり、尾上右近が代わった。

大阪松竹座は一月が「壽初春大歌舞伎」。八代目芝翫、四代目橋之助、三代目福之助、四代目歌之助の襲名披露。「吉例寿曾我」は福之助の箱王、歌之助の一万、橋之助の小林朝比奈、秀太郎の工藤奥方柳の葉。「石切梶原」は芝翫の梶原平三、東蔵の六郎太夫、鴈治郎の大庭、兒太郎の梢。「新口村」は仁左衛門の忠兵衛と孫右衛門、孝太郎の梅川。「鶴亀」は藤

十郎の女帝、橋之助の鶴、福之助の亀、歌之助の従者。「口上」。「勧進帳」は芝翫の弁慶、仁左衛門の富樫、魁春の義経。「雁のたより」は鴈治郎の三三五郎七、芝翫の万屋金之助、孝太郎のお玉。

二月は「二月花形歌舞伎」。「義経千本桜渡海屋・大物浦」は松也の銀平実は平知盛、孝太郎のお柳実とは典侍の局、新悟の義経、歌昇の弁慶。「三人形」は梅枝の若菜、種之助の奴、新悟の傾城。「金閣寺」は梅枝の雪姫、又五郎の大膳、歌昇の東吉後に真柴久吉、孝太郎の狩野之介。「連獅子」は松也の狂言師右近後に親獅子の精、尾上右近の狂言師左近後に仔獅子の精。

五月は「五月花形歌舞伎」。「戻駕」は勘九郎の次郎作、兒太郎のたより、歌昇の与四郎。「金幣猿島郡」は猿之助の清姫、藤原忠文、白拍子花子実とは清姫の霊、狂言師升六実とは忠文の霊、勘九郎の北白川の安珍実とは文殊丸顯光、門之助の如月尼、七之助の七綾姫。「野崎村」は七之助のお光、歌昇の久松、兒太郎のお染、弥十郎の久作。「怪談乳房榎」は勘九郎の菱川重信、下男正助、うわばみ三三、猿之助の磯貝浪江、七之助のお閑。

七月は「七月大歌舞伎」。「夏祭浪花鑑」は染五郎の団七、松也の徳兵衛、時蔵のお辰、孝太郎のお梶、鴈治郎の三婦、橘三郎の義平次。「二人道成寺」は時蔵の花子、孝太郎の桜子。「舌出三番叟」は鴈治郎の三番叟、孝太郎の千

蔵。「盟三五大切」は仁左衛門の源五兵衛、時蔵の小万、染五郎の三五郎。

浅草公会堂の一月は「新春浅草歌舞伎」。

「傾城反魂香」は巳之助の又平、忝太郎のおとく。「吉野山」は松也の忠信実は源九郎狐、忝太郎の静御前。「角力場」は松也の放駒、錦之助の濡髪、隼人の与五郎、梅丸の吾妻。「鈴ヶ森」は隼人の権八、錦之助の長兵衛。「棒しばり」は松也の次郎冠者、巳之助の太郎冠者、隼人の曾根松兵衛。

博多座の二月は「二月花形歌舞伎」。「男の花道」は猿之助の歌右衛門、平岳大の土生玄碩。「艶姿澤瀉祭」は幹部俳優出演。「雪之丞変化」は猿之助の雪之丞、闇太郎、男女蔵の土部三斎、米吉のお初、弘太郎のむく犬の源次、笑三郎の滝乃。

六月は「六月博多座大歌舞伎」。「芝翫、橋之助、福之助、歌之助襲名披露」。「車引」は芝翫の松王丸、橋之助の梅王丸、福之助の桜丸、歌之助の杉王丸、権十郎の時平。「藤娘」は菊之助。「毛谷村」は菊之助の六助、時蔵のお園。「河内山」は芝翫の河内山、梅玉の松江侯、福之助の数馬、歌之助の浪路、鴈治郎の高木小左衛門。「輝虎配膳」は梅玉の輝虎、鴈治郎の直江山城守、菊之助のお勝、兄太郎の唐衣、魁春の越路。「口上」。「祝勢揃壽連獅子」は芝翫、橋之助、福之助、歌之助。「幸助餅」は鴈治郎の幸助、亀鶴の関取雷五良吉。

明治座は五月が「五月花形歌舞伎」。「月形

半平太」は愛之助の半平太、忝太郎の梅松、新悟の染八、片岡亀蔵の桂小五郎、萬太郎の坂本龍馬。榎茂郎「三人連獅子」は愛之助の親獅子、忝太郎の母獅子、種之助の子獅子。「南総里見八犬伝」は愛之助の道節、鴈治郎の臺六、扇谷定正、萬太郎の現八、忝太郎の伏姫、毛野、新悟の浜路、種之助の大角、米吉の信乃、隼人の左母二郎、小文吾、橋之助の莊助、福之助の親兵衛。

十月の「錦秋名古屋 顔見世」は御園座が改築中のため、日本特殊陶業市民会館。「重の井子別れ」は魁春の重の井。「番町皿屋敷」は梅玉の青山播磨、忝太郎のお菊。「蜘蛛絲梓弦」は愛之助の五変化。「春重四海波」は愛之助の高砂頼母、忝太郎の浪路。「新口村」は梅玉の忠兵衛、孫右衛門、魁春の梅川。「連獅子」は愛之助の狂言師左近後に親獅子の精、忝太郎の狂言師左近後に仔獅子の精。

十二月の京都「吉例顔見世興行」は、南座が改修中でロームシアター京都。芝翫、橋之助、福之助、歌之助の襲名披露。「対面」は橋之助の五郎、七之助の十郎、梅玉の工藤、勘九郎の小林朝比奈、扇雀の大磯の虎、忝太郎の化粧坂少将。「義経千本桜 渡海屋・大物浦」。「芝翫の渡海屋銀平実は平知盛、時蔵の女房お柳実は典侍の局、秀太郎の義経。「二人枕久」は仁左衛門の枕屋久兵衛、孝太郎の松山太夫。「二月堂」は藤十郎の渚の方、鴈治郎の良弁。「文七元結」は芝翫の長兵衛、扇雀

のお兼、魁春の角海老女房、仁左衛門の鳶頭。「大江山酒呑童子」は勘九郎の酒呑童子、七之助の頼光。

四月の金丸座は「第三十三回 四国こんびら歌舞伎大芝居」。雀右衛門襲名披露。「神靈矢口渡」は孝太郎のお舟、彌十郎の頼兵衛。「将門」は雀右衛門の傾城如月実は滝夜叉姫、松緑の大宅光圀。「お祭り」は仁左衛門の鳶頭。「葛の葉」は雀右衛門の葛の葉、葛の葉姫、友右衛門の保名。「口上」。「身替座禪」は仁左衛門の右京、彌十郎の玉の井、松緑の太郎冠者。

六月は「名古屋平成中村座」。「対面」は萬太郎の五郎、梅枝の十郎、彌十郎の工藤、七之助の大磯の虎、新悟の化粧坂少将、勘九郎の小林朝比奈、扇雀の鬼王。「封印切」は扇雀の忠兵衛、七之助の梅川、勘九郎の八右衛門、片岡亀蔵の治右衛門。「お祭り」は勘九郎の鳶頭。「義経千本桜 川連法眼館」は扇雀の忠信、忠信実は源九郎狐、梅枝の静御前、勘九郎の義経。「弁天小僧」は七之助の弁天小僧、片岡亀蔵の南郷、彌十郎の駄右衛門、梅枝の赤星、萬太郎の忠信。「仇ゆめ」は勘九郎の狸、七之助の深雪太夫、新悟の舞の師匠、彌十郎の揚屋の亭主。

二月の「六本木歌舞伎」はE.Xシアター六本木。「座頭市」(リリー・フランキー脚本、三池崇史演出)は海老蔵の市、寺島しのぶの薄霧太夫、おすず。同演目は八月に名古屋・中

一年を象徴する漢字に「北」が選ばれた。北朝鮮の度重なるミサイル発射、核実験は世界

2017年の商業演劇

を震撼させ、一月に就任したアメリカのトランプ大統領の気紛れな言動が世界の混乱を招

水落 潔

いた。日本では安倍首相の親しい人物が経営する森友学園、加計学園を巡る優遇策が問題

日劇場と大阪・フェスティバルホール。

四月の「赤坂大歌舞伎」はTBS赤坂ACTシアター。新作歌舞伎「夢幻恋双紙 赤目の転生」(蓬萊竜太作・演出)。勘九郎の太郎、七之助の歌、亀鶴の源乃助、片岡亀蔵の善次郎。

十月の熊本・八千代座は「坂東玉三郎 映像×舞踊公演」。「口上」京鹿子娘道成寺「稲船」驚娘は玉三郎。

十一月は兵庫東豊岡市・出石永楽館の「永楽館大歌舞伎」。「仙石騒動」は「千石船帆影白濱」(竹柴其水)が原作の水口一夫作・演出。愛之助の神谷転、仙石左京、忝太郎の傾城初花太夫、仙石道之助、鷹治郎の松坂中務大輔。「弥栄出石脈」は愛之助、忝太郎、種之助。

松竹大歌舞伎の巡業は中央コースが六、七月。雀右衛門襲名披露。「三笠山御殿」は雀右衛門のお三輪、吉右衛門の蟻七実、金輪五郎、歌昇の求女実、淡海、米吉の橘姫。「口上」。「太刀盗人」は又五郎の九郎兵衛、種之助の万兵衛、吉之丞の目代。

東コースが六、七月。芝翫、橋之助、福之助

襲名披露。「猩々」は錦之助、橋之助、福之助、梅花。「口上」。「熊谷陣屋」は芝翫の熊谷、扇雀の相模、高麗蔵の藤の方、歌六の弥陀六、梅玉の義経。

西コースが八、九月。芝翫、橋之助、福之助、襲名披露。「猩々」は松緑、橋之助、福之助、梅花。「口上」。「熊谷陣屋」。

十一月の巡業は獅童が座頭。「義経千本桜すし屋」は獅童の権太、萬太郎の弥助、米吉のお里、片岡亀蔵の弥左衛門、亀鶴の梶原平三。「釣女」は亀鶴の太郎冠者、萬太郎の大名、米吉の上臈、片岡亀蔵の醜女。

四月に幕張メッセのニコニコ超会議で「超歌舞伎」。「花街詞合鏡」で獅童と初音ミクが共演。

五月に染五郎が荒川静香、高橋大輔らのフィギュアスケーターとコラボレーションしての歌舞伎とアイスショーが融合した「氷艶hyoen2017ー破沙羅」。

六月に海老蔵の自主公演「ABKAI2017 石川五右衛門外伝」が渋谷のシアターコクーン。海老蔵の五右衛門。

四月と十、十一月に「市川海老蔵 古典への誘い」の全国公演。「身替座禅」は海老蔵の山蔭右京、九團次の太郎冠者、市蔵の玉の井。「男伊達花廓」は海老蔵の御所五郎蔵。

八月に大阪で松也の勉強会「挑む」。「口上」「三社祭」「一人袴」。

同月に歌昇、種之助兄弟の勉強会「第三回双蝶会」。「一條大蔵譚」は種之助の大蔵卿、忝太郎の常盤御前、歌昇の鬼次郎、米吉のお京。「傾城反魂香」は歌昇の又平、種之助のおとく。

同月に尾上右近の勉強会「第三回研の會」。「神靈矢口渡」は右近のお舟、市蔵の頓兵衛。「羽の禿」「供奴」。

十一月に勘九郎、七之助兄弟が「特別公演」。「棒しばり」は勘九郎の次郎冠者、鶴松の太郎冠者。「藤娘」は七之助。

同月に「翔之會」。「七回忌五世富十郎を偲んで」の副題が付き、鷹之資が松緑との「矢車三番叟」を始め、「羽の禿」「うかれ坊主」、「鏡獅子」を踊った。

視され春から夏にかけて内閣支持率が急降下した。七月の都議選では小池知事の率いる「都民ファーストの会」が圧勝し自民党は大敗した。慌てた安倍首相は野党共闘が揃わぬことを見越して、10月に突如衆議院を解散した。ところが今度は民進党を吸収した小池知事の「希望の党」は惨敗し、自民党が圧勝した。世界も日本も気紛れが支配する時代になってきたように思う。演劇の世界についても同様で、メディアで取り上げられた話題性のある公演に客が殺到したが、公演が終わった途端に忘れられてしまう。人間の言動が益々利利的になってきている。景気に左右される商業演劇では、雇用の改善、株価の上昇が追い風になって興行的によくなくなったようだ。

新橋演舞場は多彩なプログラムを組んだ。一月は海老蔵一座で三代目市川右團次襲名の歌舞伎公演、二月の前半は「喜劇名作公演」と銘打って新派の波乃久里子、喜多村緑郎、河合雪之丞、松竹新喜劇の渋谷天外、藤山扇治郎らに中村梅雀が加わった一座で、一堺漁人作、門前光三脚色・演出「恋の免許皆伝」、北條秀司作、成瀬芳一補綴・演出「江戸みやげ狐狸狐狸ばなし」の新旧二作を上演した。実力者が揃い面白い舞台になった。後半はジャーズ事務所の「東×西SHOW合戦」。三月は同名のブロードウェイ・ミュージカルを宮本亜門が翻案演出した「江戸版 コメディ・トゥナイト」で、歌舞伎の片岡愛之助が主演

した。江戸の葉間屋の丁稚の丁吉が、若旦那から「恋の取り持ちに成功すれば自由な身にしてやる」という約束で奔走するが、様々な事件に巻き込まれ大騒動になるというミュージカル・コメディで愛之助の初のミュージカル出演が話題になった。内博貴、平野綾、高橋ジョージ、ルー大柴らが共演した。

四、五月は恒例のジャーズ事務所の「滝沢歌舞伎」。六月は四回目になる「熱海五郎一座」で、座頭の三宅裕司が構成、演出、出演し、渡辺正行、ラサール石井、小倉久寛、春風亭昇太らレギュラーに、ゲストとして藤原紀香が参加した。バラエティ色の濃い舞台で藤原が歌と踊りで華やかさを見せた。七月は「七月名作喜劇公演」で、歌舞伎の市村萬次郎、新派の波乃久里子、喜多村緑郎に浅野ゆう子らが加わった一座で、川口松太郎作、大場正昭演出「お江戸みやげ」と平戸敬二脚本、浅香哲哉演出「紺屋と高尾」を上演した。久里子が「お江戸みやげ」で父の十七世中村勘三郎が初演したお辻を演じた。八月はジュール・ルナール原作、山川啓作脚本、山本直純音楽、栗山民也演出のミュージカル「にんじん」で、22歳の時に主役のにんじんを演じた大竹しのぶが38年ぶりに再演し、ナイーブな少年の内に秘めた思いを巧みに見せ、中山優馬、キムラ緑子、宇梶剛士らが共演し清々しい舞台に仕上がった。九月は短期間の「OSKレビュー」の後は「松竹新喜劇新秋公演」で、屋

が「新・親バカ子バカ」と「帰ってきた男」、夜が「鼓」と「お染風邪久松留守」と劇団の財産演目を並べた。藤山寛美と二代目渋谷天外のコンビで人気を呼んだ「親バカ子バカ」は扇治郎と現天外がリメイクして演じた。舞台の仕上がりでは高田次郎と井上恵美子が演じた「鼓」が優れていた。26、27日の二日間、劇団若獅子が「新国劇百年」を記念して澤田正二郎演出に拠って「国定忠治」の「天神山」から「小松原」と、「月形半平太」の「うれし野」から「三條河原」までを上演した。笠原章が忠治と半平太を演じ颯爽とした立ち回りを見せ、市川猿之助、伊吹吾郎、瀬戸摩純らが共演した。新国劇ファンには懐かしい舞台が並んだ。名古屋、大阪でも公演した。十、十一月はスパー歌舞伎II「ワンピース」の再演。十二月は舟木一夫公演で、「歌謡ショー」のほか昼夜に齋藤雅文作「忠臣蔵」を通し上演した。

このほか三月に日生劇場でマルセル・パニョル作、山田洋次脚本、演出の「マリウス」を上演した。今井翼、柄本明、瀧本美織らが出演して情感のある舞台になっていた。九月にはサンシャイン劇場でピーター・シェファー作、松本幸四郎演出・主演の「アマデウス」を上演した。幸四郎の名では最後になる記念公演で、モーツァルトには初役の桐山照史、コンスタンツェには大和田美帆が起用された。今回も優れた舞台になったが、桐

山が堂々と幸四郎と渡り合う優れた演技を見た。

東宝は帝劇が今年もミュージカル路線を貫いた。作品名だけを列記すると、一月は「ジャニーズ・オールスターズ・アイランド」、二、三月が「エンドレス・ショック」。四月から五月の初めにかけては「王家の紋章」、五月末から七月半ばまでが「レ・ミゼラブル」、七月後半から八月が「ビューティフル」、九月が「ジャニーズ」、十月から十一月半ばまでが「レディ・ベス」。十一、十二月がユーミンの「朝陽の中で微笑んで」であった。

シアタークリエは、ストリートプレイは三本に留まり、再びミュージカル中心の路線に戻った。一月はブロードウェイから演出家のマイケル・メイヤー、音楽のトム・キットを招いて、シェイクスピアの「お気に召すまま」を上演した。演出家は時代を1960年代後半に移し、森で暮らすオーランドたちを自由を求めて自然界で生きるヒッピーに見立て、ポップスやロックで彩る舞台に仕立てた。柚希礼音がロザリンドを演じ、ジュリアン、橋本さとし、マイコ、小野武彦らが共演し新鮮な舞台になった。二月は「クリエ・ミュージカル・コレクション」、三月前半は「十人の貴公子たち」、後半は「キューティ・ブロンド」、四月はきみはいひと チャーリー・ブラウン」、五月は「ジャニーズ・コンサート」、六月はクラブ・セブン」、七月は

「RENT」、GACHY」、八月は「ジャニーズ・アイランド」とミュージカルを並べた。

十月は岡田恵和作、深川栄洋演出の「ミッドナイト・イン・パリ」を上演した。パリで明日に結婚式を迎える男女四人のラブ・コメディで、栗山千明、溝端淳平、浅田美代子、村雅俊が出演したが期待外れの凡作だった。十月は「ええから加減の再演を予定していたが、五月に主演の藤山直美が乳がんの治療のため降板することになったので、演出を古川智映子原作、小池倫代脚本、田村孝裕演出「土佐堀川」に変更した。NHKの朝のテレビ小説で放送された「あさが来た」のヒロイン広岡浅子の半世紀を描いた作品で、高畑淳子が主演し南野陽子、田山涼成、葛山信吾らが共演したが平凡な出来映えに終わった。十一月は「グディ・ロング・レッグス」、十二月は「ドッグファイト」とヒット・ミュージカルを再演した。

地方公演としては花登筐作「売らいでか!」を七月の博多座を振り出しに八月末まで各地で上演した。1968年に芸術座で初演し550回を超す上演を重ねてきた作品で、初演以来浜木綿子がずっと主演している。相手役の左とん平が病気で降板したため代役に井上順を起用した。東宝系の梅田芸術劇場は豊川悦司原作、池田テツヒロ脚本、ラサール石井演出「夫婦漫才」を制作、各地を巡演した。昭和初期、大阪の長屋で隣同士だった男女が

戦争、戦後の動乱期を生き抜く内に夫婦で漫才をするようになるという喜劇タッチの人情劇で、大地真央と中村梅雀が主演した。

明治座は歌手公演、歌舞伎、人情劇、時代劇と様々なジャンルの舞台を並べた。一月は「由紀さおり特別公演」で、樽井涼作「あなたが いれば」と「歌謡ショー」、二月は初の一月公演になる「福田こうへい特別公演」で、堤泰之作「母ちゃんの浜唄」と「コンサート」を上演した。三月は上演回数延べ500回を超えたロングセラーの谷崎潤一郎原作、菊田一夫脚本、堀越真潤色、水谷幹夫演出の「細雪」を、賀来千香子の鶴子、水野真紀の幸子、紫吹淳の雪子、壮一帆の妙子という新しいキャストで上演した。四月は「綾小路きみまろ 笑撃ライブ」、「五木ひろしコンサート」、「劇団東京乾電池創立40周年記念公演」、「桂文枝、春風亭小朝落語会」と四本の短期間公演。五月は片岡愛之助を座頭にした花形歌舞伎、六月は「水川きよし特別公演」で、市川正作「ねずみ小僧」と「コンサート」、七月は有吉佐和子原作から宝塚歌劇団の原田諒が音楽劇に潤色、演出した「ふるあめりかに袖はぬらさじ」で、大地真央が主役のお園を演じ、浜中文一、佐藤B作、中島亜梨紗らが共演した。一風変わったミュージカルになったが、舞台は一通りの出来に留まった。八月は前半が「志村けん一座」で「先ず健康」と「パラエティ」、後半が中尾ミエがプロデュースしたミュージ

カル「ザ・ディサービス・ショー」であった。九月は「藤あや子特別公演」で、川口松太郎作「明治一代女」と「歌謡ショー」で三山ひろしが参加した。十月は短期間の「中川晃教コンサート」の後、橋田寿賀子作、石井ふく子演出「おんなの家」を上演した。テレビの人気ドラマを劇化した作品で、これまでも新派をはじめ様々なキャストで演じている。神楽坂の炉端焼屋「花舎」の三姉妹を巡る人情話で、父の死後相続税の支払いを巡って交錯する姉妹の思いに、常連客のエピソードを絡めて物語が展開していく。高島礼子、熊谷真実、藤田朋子が三姉妹を演じ、錦織一清、丹羽貞仁らが共演した。練達の作者、演出家らしいそのつない仕上がり舞台であった。十一月はわざとぎる脚本・演出の「京の螢火」で、色々な作品で書かれている伏見の船宿寺田屋の女将お登勢と夫の伊助や坂本竜馬を巡る物語。黒木瞳のお登勢、寛利夫の伊助、藤本隆弘の竜馬という配役。舞台は平凡な出来栄であった。十二月は年末に「師走明治座時代劇祭」を上演した。

三越劇場は創立90周年を迎えた。一月はこの劇場を新しい本拠にしている新派が出演して有吉佐和子作、齋藤雅文演出「華岡青洲の妻」を上演した。水谷八重子の母お継、喜多村緑郎の青洲、波乃久里子の小陸に、一月に歌舞伎から新派入りした市川春猿改め河合雪之丞が妻加恵を演じて好舞台を作った。河合

は舞台映える華やかな風姿に恵まれている。喜多村と共に次代の新派の柱になるだろう。25日にはリーディング新派と題して若手俳優が川口松太郎の「春色浅草ぐらし」と「風流深川唄」を朗読劇として上演した。新派は六月にも「花形新派公演」と題して江戸川乱歩作、齋藤雅文脚色・演出「黒蜥蜴」を喜多村の明智、雪之丞の黒蜥蜴で上演した。

劇場の二月は「石井ふく子名作劇場」で小島政二郎原作、石井演出の「君はどこにいろの」を一路真輝、竹下景子、西郷輝彦、いまむらいづみらで上演した。父と娘、娘と父の愛人を巡る人情劇で面白く仕上がっていた。後半には石井ふく子監修の「ありがとう、またね」を上演した。十月には前進座が山本周五郎原作、田島栄脚色、十島英明演出「柳橋物語」を上演した。江戸下町を舞台にひたむきに生きる娘おせんを描いた人情劇で、今村文美が抑制の効いた演技でおせんの人物像を描き出した。嵐芳三郎、浜名実貴らが共演した。十二月には民藝が「仕事クラブの女優たち」を上演している。そのほか落語会や各ジャンルの芸能公演を上演した。

前進座は大劇場の長期公演として一月に京都先斗町歌舞練場で「雪月花源氏旗揚」と「人情嘶文七元結」を上演し、藤川矢之輔、河原崎国太郎らが出演した。五月は国立劇場で山田洋次監修、脚本、小野文隆演出の新作「裏長屋騒動記」を上演した。落語の「らくだ」と「井戸

の茶碗」を題材にした人情喜劇で、矢之輔、国太郎のほか嵐芳三郎、忠村臣弥らが出演した。山田が初めての前進座に書いた喜劇だった。舞台は一通りの出来に留まった。三越劇場で上演した「柳橋物語」は大阪の文楽劇場をはじめ各地で上演した。地方公演としては劇団のレパートリーである「怒る富士」、「くずい屑屋でござい」、「棒しばり」、「唐茄子屋」、「たいこどん」などを全国各地で上演した。永年に亘って前進座の主力俳優だった嵐圭史が二月の「怒る富士」を最後に退座した。TBSテレビが東京の豊洲にアジア初の360度シアター「IH1ステージアラウンド東京」を建設した。1300人収容の観客を乗せて360度回転する客席を劇場中心に配し、その周囲をステージとスクリーンがぐるりと取り囲むというシステムの劇場である。簡単に言うとも様々な舞台美術をあらかじめ飾っておいて、客席を回転させることで必要な場面が即座に現れるという新発想の劇場である。柿落し公演はヴェイレッツ、劇団☆新感線と提携した中島かずき作、いのうえひでのり演出「饗饗城の七人 花」で、小栗旬、山本耕史、成河、古田新太、近藤芳正ら人気スターが出演した。その後キャストを変えた「鳥」風「月」の計四バージョンを作りロングランを続けている。

名古屋地区は中日劇場が貸劇場として商業演劇の拠点になって来たが、十八年三月末で

閉館する。代わって四月に新築中の御園座が開場する。中日劇場の一月は「前川きよし瀬川瑛子公演で、月末に上川隆也、観月ありさらの「シェイクスピア物語」を上演した。二月は「宝塚雪組」、三月は東宝制作の「おもしろ女」を予定していたが藤山直美が病気で公演を中止した。四月はキム・ヨンジャ、舟木一夫らのコンサートと吉本新喜劇。五月は「コロッケ特別公演」と「松竹新喜劇」、六月は東宝製作のミュージカル「グレート・ギャツビー」と「スペシャル企画 吉本新喜劇と中村美津子公演」。七月は「天童よしみ公演」ほか、八月は井筒和幸監督の映画を舞台化した音楽劇「ど自慢」で森昌子、河合郁人らが出演した。後半は市川海老蔵が東京で演じた「座頭市」の短期公演。九、十月はミュージカル「レ・ミゼラブル」、十一月は「五木ひろし公演」ほか、十二月は「よしもと爆笑喜劇」や東宝製作「タデイ・ロング・レッグス」ほかであった。

大坂の松竹座は一月が歌舞伎で「芝翫一家の襲名公演」、二月は浅草歌舞伎の顔触れによる「花形歌舞伎」。三月は「関ジャニ 春のショー合戦」、四月は新橋演舞場から引つ越した「江戸版 コメディ・トゥナイト」、五月は猿之助、勘九郎、七之助らの「花形歌舞伎」六月は高田郁原作、滋井津子脚本、鍛冶明彦演出「銀二貫」を上演した。江戸時代に寒天問屋の主人に銀二貫で買われた少年松吉が様々

な試練を経て成長していく物語で、藤山扇治郎が主演して関ジャニのメンバーが共演した。寒天屋の主人役を演じる予定の桂ざこばが病気休演したため、桂米團治と高田次郎がダブルキャストで代演した。後半は「OSK春のおどり」、七月は仁左衛門、染五郎らの「大歌舞伎」。九月は大竹しのぶの「にんじん」と新派「華岡青洲の妻」、十月は「アマデウス」と「少年たち」でいずれも東京で上演した舞台の引つ越し公演、十一月は「松竹新喜劇」でこちらも新橋演舞場で演じた「新・親バカ子バカ」と「帰ってきた男」を上演した。十二月は恒例の「関ジャニ」のショーであった。

新歌舞伎座は歌手公演を中心にした路線を貫いた。一月が「石川さゆり」、二月は「山内恵介」、三月は「川中美幸」、四月は「おもしろ女」の予定だったが藤山直美の病気で公演自体を中止した。五月は「舟木一夫」、「三山ひろし」、六月は「梅沢富美男 田川寿美」、七月は「五木ひろし」で坂本冬美が特別参加した。八月は「コロッケ」、九月は「福田こうへい」、「十月は「前川清 中村美津子」コロッケ」、十一月は歌手やタレントの短期公演のあと大地真央、中村梅雀の「夫婦漫才」、十二月は「天童よしみ」というラインアップだった。

京都の南座は「改正耐震改修進法」に基づく耐震工事を行って18年11月に再開場する予定である。

博多座は一月がミュージカル「天使にラブ

ソングを」。二月が「花形歌舞伎」、三月はG2作・演出の「熱血！ブラバン少女」で、福岡の精華女子高吹奏学部が制作した同名のCDを14年に発売したところ3万枚を超えるヒットを記録したことを描いたドキュメント・ドラマ。博多華丸、鳳蘭らが出演し精華女子高の吹奏楽部もゲスト出演した。四月は「石川さゆりコンサート」と「細雪」、五月は「宝塚月組」、六月は「芝翫一家襲名の歌舞伎」、七月は浜木綿子主演の「売らいでか！」とミュージカル「グレート・ギャツビー」。八月は「レ・ミゼラブル」、九月は「玉三郎と鼓童」の太鼓公演、十月は「エンドレス・ショック」、十一月は「夫婦漫才」、十二月は例年通り市民に開放した。

今年も多くの演劇関係者が亡くなった。俳優の神山繁（1月3日、87歳）、松方弘樹（1月21日、74歳）、藤村俊二（1月25日、82歳）、青木玲子（2月13日、83歳）、京唄子（4月8日、89歳）、月丘夢路（5月3日、95歳）、日下武史（5月15日、86歳）、野際陽子（6月13日、81歳）、中嶋しゅう（7月6日、69歳）、演出家の青井陽治（9月1日、69歳）、新派の永久保一男（9月17日、87歳）、作家の早坂暁（12月16日、88歳）。ご冥福を祈りたい。

二〇一七年の現代演劇

日本の演劇界をけん引した演出家蜷川幸雄さんが亡くなって1年半が過ぎた。2017年も蜷川さんという中心軸を失った喪失感がまだ残っているように思えた。年末に、蜷川さんが元氣だったなら、という出来事があった。20年東京五輪の開会式など式典演出チームの8人が発表されたが、映画界、音楽界、CM界の顔触れが並び、演劇界は狂言師の野村萬斎だけだった。08年北京五輪のチャン・イーモウ監督をはじめ、12年ロンドン五輪、16年リオ五輪ともに映画監督が演出を手掛けた。映画監督、若手の起用は自然な流れなのだろうが、18年2月の韓国・平昌冬季五輪は、12月の世田谷パブリックシアターで「ペール・ギュント」を演出した韓国のヤン・ジョンウンが担当するだけに、不在の重さを感じた。

そんな蜷川イズムを継承する舞台が、年の迫った12月、芸術監督を務めた彩の国さいたま芸術劇場で上演された。シェイクスピア作品全37作の上演を目指した「シェイクスピアシリーズ」の第33弾「アテネのタイモン」。蜷川さんの遺志を継いだ吉田鋼太郎が演出・主演し、藤原竜也らが出演した。演出助手を務

めた井上尊晶らチーム蜷川のスタッフも結集。蜷川演出を思わせる場面を残しつつ、スケールの大きい舞台を作り上げた。

7月には「NINAGAWA・マクベス」が市村正親の主演で上演された。蜷川演出を忠実に再現し、市村もこん身の演技を見せた。追悼公演として蜷川さんとの所縁の深いロンドン、香港でも上演された。

蜷川さんが育んだ高齢者劇団さいたまゴールド・シアターは、若手中心のさいたまネクスト・シアターのメンバーも参加して、岩松了作・演出「薄い桃色のかたまり」を上演した。東日本大震災後の被災者たちの苦しみ、悲しみを詩情豊かに優しく包み込んだ群像劇。蜷川さんの遺産である劇団は進化を続けている。

最近、台頭している若手劇作家の作品が数多く上演された。自らの劇団、ユニットでの上演だけでなく、外部の劇団などから執筆依頼されるケースが増えていく。特に女性たちの活躍が目立った。筆頭となる詩森ろばが、主宰する風琴工房で作・演出した「アンネの日」は生理用品の開発を通して、かわる女性たち1人1人のドラマが浮かび上がる秀

林 尚 之

作。アイスホッケートームをモデルに、男たちの闘いを描いた「ベナルティ・キリング」を再演し、沖繩の歴史をたどるセミドキュメント風「ちゅらと修羅」を初演した。俳優座に書き下ろした真鍋卓嗣演出「海の凹凸」は公害問題の市民講座に協力した印刷屋（志村史人）を主人公に、水俣病と向き合う群像劇。18年、詩森は風琴工房からユニット「シリアルナンバー」として再始動する。

長田育恵は主宰するてがみ座「風紋」青のはて2017〜で病の身で最後の旅に出た宮沢賢治の人々との出会いを描き、劇団民藝に書き下ろした「仕事クラブ」の女優たちは昭和初期にアルバイトあつせん業を始めた新劇女優たち（桜井明美）を主人公に、彼女たちを助ける老婦人を奈良岡朋子が演じた。芥川龍之介作品を元にした「百鬼オペラ『羅生門』」も話題となった。KAKUTAの桑原裕子がアル☆カンパニーで作・演出した「荒れ野」（平田満）は、団地の1室で暮らすことになった6人の揺れ動く人間模様を描いた作品で、ハヤカワ「悲劇喜劇賞」を受賞した。

ミナモザの瀬戸山美咲は、椿組で一人の死をめぐる人々の論争劇「始まりのアンティゴ

ネ」を作・演出し、人気映画を舞台化した「グリーンマイル」でも上演台本と演出を担当した。パドックス定数の野木萌葱は高校球児をめぐる物語で、20年前の出来事の真相に迫る「九回裏、二死満塁」のほか、グリコ・森永事件の犯人の実像を追った「怪人21面相」が和田憲明演出で再演され、緊迫感のある舞台となった。

報道現場への政治的圧力が増える現状を反映した秀作が相次いだ。関西で燈座を主宰する石原燃の作、小笠原響演出のPカンパニー公演「白い花を隠す」は、民衆法廷を取材したNHKのドキュメンタリー番組が政治的圧力で大幅改変に追い込まれた実話をもとに、テレビ局と下請けの制作会社の関係性も浮き彫りにした。二兎社の永井愛が作・演出した「ザ・空気」もキャスト（若村麻由美）ら報道現場にかかる圧力を生々しく描き、出色だった。

トラッシュマスターズ主宰の中津留章仁は、ヘイトスピーチなど現代の病理にメスを入れる「たわけ者の血潮」をはじめ、鉄道の高架事業に反対する住民のエゴをえぐり出した「不埒」・トム・プロジェクトに生活環境の変化から生まれた花粉症を切り口にした社会派コメディ「明日がある」かな、劇団青年座に芸能事務所を舞台に、正義とは何かを問う「断罪」（黒岩亮演出）を書き下ろした。

劇団チョコレートケーキの古川健は、自殺

した孤独な老人が残したノートから、高度成長期に生きた人々の哀感が浮き上がる「60's エレジー」、ロシア革命をテーマにした「祖国は我らのために」、劇団青年座にナチス政権下のドイツ市民の心の変遷を描いた「旗を高く掲げよ」、劇団昂には冷戦終結前後の東独で秘密警察に監視される市民と監視する側の相克を捉えた「幻の国」、水戸芸術館に東京五輪前の誘拐事件に迫る「斜光」と、色合いの異なる作品を連発した。

赤堀雅秋は市井の人々のやるせない姿が喜劇タッチな群像劇「世界」（風間杜夫）、社会からこぼれ落ちそうな若者の青春群像劇「流山ブルーバード」（賀来賢人）と、赤堀ワールドを造形。JACROWの中村暢明は「骨と血」で家具販売会社を舞台に父娘の暗闘を描いた。倉持裕は江戸川乱歩の短編を巧みに織り込んだ「お勢登場」（黒木華）が充実。

ポスト蜷川というべき演出家たちの活躍ぶりも顕著だった。栗山民也は、脱走して豚小屋に41年隠れ住んだソビエト兵士の実話を元にした、アソル・フガード作「豚小屋」（北村有起哉）を皮切りに、ラシーヌ作「フェードル」（大竹しのぶ）、ジロドゥ作、「トロイ戦争は起こらない」（鈴木亮平）、井上ひさしの幻の作品「私はだれでしょう」（吉田栄作）など、多岐にわたる作品を重厚かつ繊細に演出した。鶴山仁は、所属する文学座、民藝、青年座、文化座、東演の5劇団の交流プロジェクト

トによる三好十郎作「その人を知らず」を演出。弾圧の下で召集を拒み続けた青年（木野雄大）を通して、暗い影が覆いつつある現代の状況に切り結ぶ舞台で、新劇の真骨頂をみせた。そのほか、別役実作「鼻」（江守徹）、井上ひさし作「円生ととん生」（ラサール石井）を手掛けた。

次代を担う1970年代生まれの中堅の活躍ぶりが際立った。演劇集団円の森新太郎は、ノーベル賞作家と尋ねてきた男が心理ゲームを展開するシュミット作、「謎の変奏曲」（橋爪功）、フジノサツコ脚本、怪談牡丹燈籠、ハロルド・ピンター作「管理人」（溝端淳平）で、鮮烈な印象を残した。18年9月から新国立劇場の演劇部門芸術監督に就任する小川絵梨子は、娘（那須小夜子）と母親（鷺尾真知子）の暴力的な対立がすさまじい、マクドナーのデビュー作「ビューティ・クイーン・オブ・リナーン」、ストリンドベリ作「死の舞踏」（池田成志）「令嬢ジュリー」（城田優）の昼夜交互上演、トム・ストッパード作「ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ」（生田斗真、菅田将暉）など、確かな仕事をした。文学座の上村聡史は、劇団公演で三好十郎の大作「冒した者」、真船豊作「中橋公館」を演出し、戦争をめぐる人々の変容をきめ細かく演出した。

イキウメの前川知大は完全食を求めて不老にたどりついた孤独な男をめぐる「天の敵」や

「散歩する侵略者」、自作に大きく手を入れた「プレイヤール」が長塚圭史演出、藤原竜也主演で上演された。イキウメは「天の敵「散歩する」の舞台成果で紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞した。温泉ドラゴンのシライ・ケイタは、故若松孝二監督の映画の舞台版「実録・連合赤軍 あさま山荘への道程」を作・演出し、廃虚となった兵器工場をめぐる通称アパッチ族の攻防を描いた「SCRAP」を書き下ろした。

長塚圭史は北条秀司「王将」3部作の通し上演、ピランデルロ作「作者を探す六人の登場人物」を演出し、15年に続く再演「かがみのかなたはたなかのなかに」(松たか子)を作・演出した。藤田俊太郎はパトリック・シャンリイ作「ダニーと紺碧の海」(松岡昌宏)で孤かな男女の心のひだをえぐる恋愛劇をみせた。劇団チヨコレイトキーの日澤雄介は劇団公演「60'sエレジー」あの記憶の記録」のほか、「幻の国」「SCRAP」も手掛けた。

野田秀樹は、歌舞伎の始まりをたどりつつ、盟友だった中村勘三郎さんへのオマージュとなった「足跡姫〜時代錯誤冬幽霊〜」(宮沢りえ、妻夫木聡)で役者の矜持を描き、勘三郎さんと共演した「表に出ろいっ!」の英語版「One Green Bottle」では、英国のキャサリン・ハンターを主演に迎えて、世界を席巻する不寛容の有り様を活写した。同世代の劇作家協会会長の鴻上尚史は

「ベター・ハーフ」、副会長の渡辺えりは「鯨よ!私の手に乗れ」を作・演出した。ナイロン100℃のケラリーノ・サンド

ロヴィッチは、東京五輪前の東京を舞台にした「陥没」(井上芳雄)、別役実風の不条理劇「ちよつと、まっつてください」の新作に加え、チェーホフ作品第3弾となる「ワニヤ伯父さん」(段田安則)で、従来からのチェーホフ舞台に新しい息吹をもたらした。大人計画の松尾スズキの「業音」(平岩紙)は、15年ぶり再演でもいかがわしさが健在だった。

新劇系劇団も意欲的な作品が続いた。創立80周年の文学座は、正岡子規の青春を狂食ぶりから描く瀬戸口郁作、西川信廣演出「食いしん坊万歳!」(佐川和正)、江守が別役実作品に初挑戦した「鼻」、上村演出「冒した者」「中橋公館」、アトリエ公演で戌井昭人の脚色、所奏の演出で山本周五郎作品を蘇らせた「青べか物語」、ノゾエ征爾作、生田みゆき演出「鳩に水をやる」と、中堅・若手の奮起は90周年に向かって頼もしい。

民藝はふたぐちつよし作、中島裕一郎演出で終末医療の病院を舞台にした「野の花ものがたり」、ナガイヒデミ作、兒玉庸策演出で四国の山あいの集落に生きた女性「白色ともゑ」を主人公にした「送り火」、天衣無縫な知の巨人南方熊楠(千葉茂則)を描いた小幡欣治作「熊楠の家」を丹野郁弓演出で再演。ペートベント、彼の残した33の変奏曲の謎を追う女性

(檜山文枝)の人生が時空を越えて交錯するモイゼス・カウフマン作「33の変奏曲」を丹野の訳・演出で上演した。

俳優座はモリエール作、高岸未朝演出「病は気から」(中野誠二)で幕を開け、堀江安男作、眞鍋演出「北へんろ」(川口敦子)は遍路宿を舞台に死者の目を通した異色の鎮魂劇。斎藤憐作、森一演出「クスコ 愛の叛乱」は挑戦的な舞台で、ラポ公演も若手劇団オイスターズを主宰する平塚直樹の作・演出、転がる石に苦むさず」を上演するなど新しい試みに挑んだ。

劇団青年座はマキノノゾミ作、宮田慶子演出「わが兄の弟」(廣作アンソン・チェーホフ傳)は若き日のチェーホフ(横堀悦夫)の謎のサハリン行きまでを兄たちとの相克とともに描いた。笑いの中に家族の絆が浮き彫りとなる太田善也作、黒岩亮演出「真つ赤なUFO」、生きることの大切さがストレートに伝わる水上勉作、小松幹生補綴「ブンナよ、木からおりてこい」は第5次上演(磯村純演出)を終了。スタジオ公演は、金澤菜乃英脚色・演出「江戸怪奇譚ームカサリ」、津嘉山正種演出・主演「かあちゃん」、福田善之作、磯村純演出「真田風雲録」で、「江戸」主演の山路和弘は毎日芸術賞を受賞した。

創立75周年の文化座は、原莞を抱えた故郷を舞台にした水上勉脚本、八木柊一郎作、黒岩演出「故郷」のほか、米国統治下の沖縄で反

戦運動を戦った2人の闘士に光を当てた杉浦久幸作、鶴山演出「命(めち)どう宝」、孤独な青年が老女との出会いで変わる姿が清々しい、斎藤祐一作、西川信廣演出「しゃぼん玉」を上演。3作品すべてに出演した代表の佐々木愛の熟達した演技が光った。

青年劇場は、劇団の創立者土方与平の半生を描いた福山啓子作、瀬戸山美咲演出「梅子とよつちゃん」、戦後パリの工房を舞台に私たちの姿を描くグランペール作、藤井ごう演出「アトリエ」、久坂栄二郎作、太谷賢治郎演出「原理日本」、ふじたあさや作・演出で戦前の言論弾圧の横浜事件をテーマに「事件」という名の事件」、劇団朋友は幸田露伴・文父子を描いた瀬戸口郁作、西川信廣演出「蝸牛庵物語」、飯島早苗脚本、磯村純演出「花よりもなほ」を上演した。

劇団浅敷童子は東憲司の作・演出で、戦後の筑豊を舞台に父親と三姉妹の確執を描く「蟬の詩」(佐藤哲)、愛する者を戦争に奪われた女たちと脱走兵たちの絆を描く「標's h i r u b e」と、手作りの塵芥のスペクタクルな美術は圧倒的。東京演劇集団風は創立30周年記念公演でブレヒト作、浅野佳成演出「パールの賛歌」や「窓辺の馬」(ジャンヌ・ダルク)など骨太舞台を生み、演劇集団キヤラメルボックスは成井豊作・演出「スロウハイツの神様」デイアーズライン」など、心を動かすエンターテインメント路線を貫いた。

公共劇場も挑戦的な作品が並んだ。宮田慶子芸術監督の最後のシーズンとなった新国立劇場は、宮田演出「ブライムたちの夜」(浅丘ルリ子)など現代欧米戯曲を初演する一方、三島由紀夫作「白蟻の巣」(安蘭けい)を谷賢一、安部公房作「城塞」(山西惇)を上村聡史、田中千禾夫作「マリアの首」(鈴木杏)を小川絵梨子と、敗戦直後の日本、日本人を描いた作品に若手が挑んだ。評価の高い現代劇に新たな取り組み、ジョン・オズボーン作、千葉哲也演出「怒りをこめてふり返れ」(中村倫也)、ウィリアム・サローヤン作、宮田演出「君が人生の時」(坂本昌行)を上演した。

東京芸術劇場は野田の「足跡姫」で年明け、ジョン・ケアード演出「ハムレット」(内野聖陽)は能舞台を思わせる美術で、スタイリッシュな舞台。ルーマニアのシルヴィウ・ブルカレーテ演出「リチャード三世」(佐々木蔵之介)は、実験的な試みにあふれ、恐怖劇として成功した。

開場20周年を迎えた世田谷パブリックシアターは、芸術監督の野村萬斎演出・主演、木下順二作の記念公演「子午線の祀り」や、韓国人演出家ヤン・ジョンウン演出のイブセン作「ペール・ギュント」(浦井健治)など大型企画を揃え、ドイツの児童文学者ベンドルフ作品をもとに小山ゆうな訳・演出「チック」(柄本時生)などを上演。萬斎は「子午線の祀り」の演出で千田是也賞「管理人」でホームレスを

演じた温水洋一が紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。

同じく開場20周年の神奈川芸術劇場は芸術監督白井晃の演出で、性に目覚めた少年の悲劇を描くヴェデギント作「春のめざめ」(志尊淳)、一夜にして女性に変身し、時空を越えて生きる青年貴族を主人公にしたヴァージニア・ウルフ原作「オーランド」(多部未華子)など、海外戯曲を積極的に上演した。

海外公演では、フランスの世界的演劇祭アヴィニョン・フェスティバルで、SPAC(静岡県舞台芸術センター)芸術総監督の宮城聡演出のギリシャ悲劇「アンティゴネ」がオーブニングを飾った。法王庁中庭に水をはり、歴史的建造物の壁に光と影を映す演出は話題を呼んだ。創立20周年のチェルフィッチュの岡田利規は「部屋に流れる時間の旅」で欧米ツアーを行い、代表作を改変した「三月の5日間」リクリエーション」を国内で巡演した。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、浅草のレコード店家族を通して戦争に翻弄される人々の姿が愛おしい「きらめく星座」(木場勝己)や「イヌの仇討ち」(大谷亮介)「円生と志ん生」を上演し、「きらめく星座」は文化庁芸術祭大賞を受賞した。シス・カンパニーは、「令嬢ジュリー」「死の舞踏」のほか、出演者が小学生役に挑んだ三谷幸喜作・演出「子供の事情」(天海祐希)、北村想作、寺十悟演出「黒塚家の娘」(風間俊介)、「ローゼンクランツと

ギルデンスタインは死んだ」「ワーニャ伯父さん」と、多彩な演目で多くの観客を集めた。

名取事務所はカナダの現代演劇を連続上演した。ニコラス・ビヨン作、小笠原響演出「屠殺人ブッチャー」、ハナ・モスコヴィッチ作、小笠原響演出「ベルリンの東」、ビヨン作、扇田拓也演出「エレファント・ソング」と充実した舞台成果を上げ、出演した佐川和正、森尾舞が紀伊国屋演劇賞個人賞を同時受賞した。加藤健一事務所は、代役に決まった往年の名優の心理を描くクリフォード・オデッツ作、松本佑子演出「喝采」、多様な生き方を問うカトリヌ・フィユ作、堤泰之演出「夢一夜」と、質の高い舞台を上演した。

パルコ劇場が建て直し中のため、外部劇場の公演が続くパルコステージは、虚言が巻き起こす悲喜劇の三谷幸喜作・演出「不信し彼女が嘘をつく理由」(優香)、鈴木聡作、中屋敷法仁演出「サクラパバオ」、鄭義信作・演出「すべての四月のために」(森田剛)など、数多い舞台を制作した。

シエーティプロデュース公演では、ベス・ヘンリー作、小川絵梨子演出「クラム・オブ・ザ・ハート」(安田成美)をはじめ、せりふなしのノンバーバル「W3」、鈴木勝秀演出「ディファインド」(戸塚祥太)、ブイグ作、鈴木裕美演出「蜘蛛女のキス」(大倉忠義)などがあった。

外国人演出家による舞台も刺激的だった。

ロイヤルシェークスピアアター出身のリチャード・トワイマン演出のラクロ作「危険な関係」(玉木宏、鈴木京香)は緊迫した恋愛ゲームを繰り広げ、英国人演出家フィリップ・ブリーンが手掛けた「欲望という名の電車」は、大竹しのぶランチが圧巻で、新しい「欲望」を生み出した。

来日公演は、オランダの人気演出家イヴォ・ヴァン・ホーヴェの演出「オセロー」に現代の軍服姿での登場など、斬新さに驚きがあった。03年初演から主演するオセロー役の俳優など、演技陣も素晴らしかった。

大ベテランも活躍した。85歳の仲代達矢は無名塾公演のプレヒト作「肝つ玉おつ母と子供たち」で28年ぶりに肝つ玉おつ母を演じ、86歳の浅利慶太氏がジロドゥ作「オンディーヌ」、盟友目下武史さんに捧げる加藤道夫作「思い出を売る男」、「この命誰のもの」を演出し、健在ぶりをみせた。75歳の松本白鸚は幸四郎として現代劇最後の舞台となったピーター・シェーファー作「アマデウス」に演出も兼ねて主演。その演技で文化庁芸術祭大賞を受賞した。

新劇場も次々とオープンした。東京・豊洲市場前に客席が360度回転する劇場「ステージアラウンド」が開場した、中島かずき作、いのうえひでのり演出でこけら落とし公演となった劇団☆新感線「罫嚢城の七人 seasons花」は小栗旬を主演に多くの観客

を集め、その後も出演者を変えながら、「鳥」「風」「月」が上演され、1年以上のロングランになった。有楽町にも「オルタナティブシアター」がオープン。20年東京五輪を前に増える訪日外国人客を意識した、ノンバーバルパフォーマンス「アラタ」を上演した。

劇団四季の創立メンバーの目下武史さんは旅行先のスペインで急死し、出演する舞台「アザー・デザート・シティーズ」の途中で倒れた中嶋しゅうさん、男だけの劇団「カクスカ」で活躍した井之上隆志さん、翻訳劇を中心に活躍した翻訳家で演出家の青井陽治さんと、舞台をこよなく愛した人たちが亡くなった。

2017年のミュージカル

日本初のブロードウェイ・ミュージカル「マイ・フェア・レディ」は、英国の厳しい階級制度が内包されている。人種差別、貧困、戦争、革命など重いテーマで現代に迫るミュージカル作品が多くなった。近年は海外のヒット作品が二、三年で日本に上陸する時代になり、新作、再演、来日公演と2017年のミュージカル界はにぎやかであった。

子役の実力と社会派ミュージカル

2005年ロンドン、08年ブロードウェイで初演された「ビリー・エリオット」リトル・ダンサー（リー・ホール脚本・歌詞、エルトン・ジョン音楽、ステイヴン・ダルドリー演出）が日本で初演できたのは奇跡に近い。11歳の少年ビリーが主役だからである。しかもタップ、バレエ、ジャズダンス、ヒップホップなどのダンスのほか歌、芝居とすべてが要求される。オーディションに1346人が応募、その中から10人にしぼり、一年間のレッスンで選ばれた5人のビリー（加藤航世・木村咲哉・前田晴翔・未来和樹・山城力）が熱演した。変声期で将来の可能性もわからない少年たちだけに懸命に演じ

る姿は感動的だった。

イギリスの炭鉱町でストライキが起きる一触即発の時に、炭鉱夫の父（吉田鋼太郎・益岡徹Wキャスト）に隠れてバレエ教室に通うビリー。その才能を認めたウィルキンソン先生がロイヤル・バレエスクール受験をすすめ、父親が反対する。ビリーが激しいダンスを踊る「アングリー・ダンス」、オルダー・ビリー（大貫勇輔・栗山廉）とのパ・ド・ドゥなど見ものだった。バレエ教師の袖希礼音はクールで切れ味のあるダンス、島田歌穂は暖かい人間味を出した。（赤坂ACTシアター7月19日・10月1日、梅田芸術劇場10月15日・11月4日）

1998年ブロードウェイ初演の「パレード」（アルフレッド・ウーリー作、ジェイソン・ロバート・ブラウン作詞・作曲、森新太郎演出）が日本初演（5月、東京芸術劇場プレイハウス）された。20世紀初頭、米国南部アトランタで起きた冤罪事件のミュージカル化。北部からきたユダヤ人のレオ（石丸幹二）が白人少女殺害犯人に仕立て上げられてゆく。妻のルシール（堀内敬子）は冤罪を晴らすと立ち上がる。石丸の端正な歌声が「殺せ」

横溝 幸子

と叫ぶ民衆に押し潰されてゆく。南北の対立、黒人やユダヤ人の差別意識。現代でも起きている悲劇が美しい曲調とともに浮き彫りにされた。

再演の「メンフィス」（12月、新国立劇場中劇場）も、50年代の米南部メンフィスを舞台に黒人音楽を通して人種差別と闘った実在の白人DJをモデルにした作品。2015年の日本初演で好評を博し、再演ではヒューイ役の山本耕史が演出も担当。黒人専用クラブで白人のヒューイは黒人歌手フェリシア（濱田めぐみ）の才能を認め、ラジオで黒人音楽を流す。濱田のソウルフルな歌が圧巻。山本の演出も細部まで目が行き届いている。

漫画を原作にした「デスノート」（アイヴァン・メンチエル脚本、ジャック・マーフィー歌詞、フランク・ワイルドホーン作曲、栗山民也演出）は日米合作ミュージカル。死神（石井一孝）が落とされたノートを拾った夜神月（浦井健治・柿澤勇人）が社会の敵とされる人々の名前を書いてゆくと次々死んでゆく。女死神は濱田めぐみ。台湾公演も成功させた。ミュージカル制作の上でホリプロの力が大きい。

「LIT TLE VOICE」(ジム・カー
トライト作 日澤雄介演出)は、引きこもり
少女(大原櫻子)が、マリリン・モンローや
ジュディ・ガーランドらの歌の力によって人
生を切り拓いてゆく(5月 天王洲銀河劇
場)。オリジナル・ミュージカル「わたしは真
悟」(1月 新国立劇場中劇場)は、樫原かず
おの長編SF漫画の舞台版(谷賢一脚本、ト
クマルシューゴ音楽、フィリップ・ドゥクフ
レ演出・振付)。小学6年生の美鈴(高畑充
希)と悟(門脇麦)の純愛から奇蹟が起こり産
業用ロボットに命がとまり、真悟(成河)と名
乗る。大人になって忘れてゆくことやテクノ
ロジー、人工知能、生命などの問題が含まれ
る。映像やダンスパフォーマンス、音楽が巧
みに融合されている。

東宝は「レ・ミゼラブル」30周年

東宝が1987年日本初演した「レ・ミゼ
ラブル」が30周年を迎えた。記念公演は5月
の帝国劇場を皮切りに福岡や大阪を巡演、10
月17日、名古屋・中日劇場までロングランし
た。ロンドン初演25周年を機に舞台装置、照
明、音響、衣裳、演出を一新した新演出版は日
本でも2013年から上演、映像を多用して
いる。出演者もトリプル・キャストが毎回変
わる。ジャン・バルジャンは福井晶一、ヤ
ン・ジュンモ・吉原光夫(ジャベールも兼ね
る)というように時代に合った実力者が揃

う。コゼットに乃木坂46の生田絵梨花、エボ
ニーヌに9代目ビクターパンの唯月ふうか、
革命学生のリリーダ格アンジョルラスに相葉
裕樹というように少しずつ入れ替わる。とく
に初演時に成長後のコゼットを演じた鈴木ほ
のかが、少女コゼットをいじめる宿屋のマダ
ム・テナルディエでオーディションに選ばれ
たことが30年の歳月を感じさせた。

専用劇場を持ちロングラン公演を行なう劇
団四季と異なり、二、三年ごとに何カ月かの
公演を続けるのが東宝式ロングランである。
初演の「レ・ミゼラブル」から島田歌穂がス
ターの座を得たように現在でも新しいミュー
ジカル俳優が「レ・ミゼラブル」から育ってゆ
く。

帝劇での新作上演は二本。8月の「ビュ
ティフル」(ダグラス・マクグラス脚本、マー
ク・ブル二演出)は、「ナチュラル・ウーマ
ン」などで知られるシンガー・ソングライ
ター、キャロル・キングの若き日を描いた実
話。キャロル役に歌手の平原綾香のほか声優
の水樹奈々のWキャストは実力伯仲。平原は
傷ついても立ち上がる強さを、水樹は多感な
心の揺れを繊細につづった。伊礼彼方の夫で
作詞家のジェリーは、キャロルについていか
れなくなる弱さを出し、親友でライバルの作
詞・作曲家コンビ、ソニンのシンシアと中川
晃教のバリーの明るさがい。

松任谷由実と帝劇のコラボレーション第三

弾「朝陽の中で微笑んで」(11月27日―12月20
日)は、脚本・演出の松任谷正隆がストー
リーの設定を50年後の未来の物語にし
たこともあって歌と芝居がかみ合わなかった
のが残念だった。再演物は「王家の紋章」「レ
ディ・ベス」で、初演物は日生劇場とシア
タークリエが多かった。

日生劇場での初演作「ビッグ・フィッシュ」
(ジョン・オーガスト脚本、アンドリリュ
リップ作詞・作曲、白井晃演出)は、ティム・
バートン監督映画のミュージカル版。奇想天
外な話ばかりする父(川平慈英)に息子(浦井
健治)は反発するが、父の過去を辿るうちに
ホラ話の中の真実に気づく。父と息子の絆、
夫婦愛を描いた人生賛歌だ。逆に韓国ミュー
ジカル「フランケンシュタイン」は、生命創造
に挑む研究者フランケンシュタイン(柿澤勇
人・中川晃教)が軍医アンリ(加藤和樹・小西
遼生)を生き返らせようとして怪物を生み出
してしまふ。2部の怪物の復讐劇が凄く、後
味はよくない。

「紳士のための愛と殺人の手引き」(ロバ
ート・L・フリードマン脚本・歌詞、ステイ
ブン・ルトバク音楽、寺崎秀臣演出)は、
2014年のトニー賞受賞作品。貧しい青
年モンティ(ウエンツ瑛士・柿澤勇人)は、伯
爵継承順位が8番目と知り、上位継承者を
次々殺してゆくスラップスティック・コメ
ディ。伯爵、聖職者、慈善家の婦人など殺さ

れる8人すべてを市村正親が演じて笑わせる。その変幻自在ぶりが見事だった。(4月8日―30日)

ミュージカル『グレート・ギャツビー』が切なく哀しい。フィッツジェラルドの同名小説をもとに小池修一郎が宝塚歌劇で1991年初演した作品を男女優版に手直した脚本・演出作品。音楽をブロードウェイの新進作曲家リチャード・オベラックに依頼した新版でもある。対岸に住む大富豪ブキャナン(広瀬友祐)の妻ディジー(夢咲ねね)をひたすら愛し続けるギャツビー(井上芳雄)の途な愛。井上は安定した歌唱力で微妙な心の揺れを巧みに表現した。(5月8日―29日)

12月「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、日本初演50周年のタイトルつき。森繁久彌のテヴィエの演技がまだちらつくが、市村正親が西田敏行を経てそのにおいを継承している。

シアタークリエでの初演作「キューティ・ブロンド」(ヘザー・ハック脚本、ローレンス・オキーフ、ネル・ベンジャミン作詞・音楽、上田一豪演出)はピンク好きのブロンド娘(神田沙也加)が一念発起してハーバード大学ロースクールに合格というただハッピーな作品。オフ・ブロードウェイで1967年に初演されてから50周年に当たり、スヌーピーを描いた「きみはいい人、チャーリー・ブラウン」(チャールズ・M・シュルツ原作、クラーク・ゲスナー脚本・作詞・音楽、マイ

ケル・メイヤー追加脚本、アンドリュース・リップ追加作詞・音楽、小林香演出)が村井良大(チャーリー)、中川晃教(スヌーピー)で久し振りに上演された。過去に坂本九・小堺一機(共にチャーリー)、市村正親(スヌーピー)らが演じている。

井上芳雄主演の「グディ・ロング・レッグス」は、何回観ても感動する。

玉野和紀が脚本・構成・演出・振付・出演した「CLUB SEVEN」は11作目。「ZERO」と銘打った今作は、人気シリーズの土台を作った玉野和紀・吉野圭吾・東山義久・西村直人・原田優一が集結、蘭乃はな、香寿たつきを加えた7人が、ダンス、コント、ミニミュージカルなど見せ場を盛り込んだ。玉野は日本を代表するタップの名手でオリジナル・ミュージカルの作り手である。

『Endless SHOCK! 1500回』

ジャーニーズ事務所の若手たちは、舞台のたびに成長している。帝劇を4カ月独占してもつねに満員というのは社会現象なのだろう。12月、1月の「JOHNNY'S ALL STARS ISLAND」は、SixTONES、Snow Man、Mr.KING、など若手グループの競演。2、3月は17年目を迎えた堂本光一の「Endless SHOCK」。3月31日には、通算上演回数1500回を迎えた。9月の大阪、10月の博多と2年ぶりの地

方公演もこなしてまだ終わりは見えない。激しい立ち回り、22段の階段落ちも続く。

9月の帝劇「JOHNNY'S YOU & ME ISLAND」は、初めてジャーニーズJr.だけの出演で固めた。

日生劇場では9月「少年たち」をSixTONESとSnow Man中心のキャストで上演。10月はABC座「ジャーニーズ伝説2017」。シアタークリエでは、8月がふおゆく主演の「GACHY」。新橋劇場では12年目の「滝沢歌舞伎」(4月)。滝沢秀明とV6の三宅健が共演した。

個人的には屋良朝幸の活躍が目立つ。20世紀初頭から現代まで1台のピアノが辿った道をアーヴィング・バーリンの曲で綴った「I LOVE A PIANO」(上演台本・演出小林香、5月25日―6月11日 DDD青山クロシアター)、オリジナル・ミュージカル「THE CIRCUS!」(TETSU HARU企画・構成・演出・振付)の主人公ケント、「ドッグファイト」のエディを主演するなどミュージカル俳優として成長している。

好調続く宝塚歌劇団の底力

103周年を迎えた宝塚歌劇団は、103%の入場率を堅持して好調が続く。星組トップ北翔海莉の退団後、紅ゆずる・綺崎愛里新トップコンビのお披露目がマサラ・ミュージカル「オーム・シャンティ・

オーム(小柳奈穂子作・演出、1月6日―18日、東京国際フォーラムホールC)だった。東京宝塚劇場でのお披露日は、「スカーレット・ピンバーネル」(5月6日―6月11日)と作品に恵まれた。

月組も珠城りょうが24年ぶりの「グラランドホテル」(2月21日―3月26日)の男爵役でトップお披露目をした。初演では簿記係を主役に据えたが、今回は原作に戻している。ブロードウェイ・オリジナルのトミー・チューンが特別監修で来日した。研究科9年でトップになった珠城もラッキーなスタートを切った。

トップの在任期間が二年余と短いせいか、たえず退団公演がある。宙組の朝夏まなとの相手役であるトップ娘役実咲凜音は「王妃の館」(浅田次郎原作、田渕大輔脚本・演出)の千秋楽(4月30日)で退団した。朝夏自身は「神々の土地」(ロマンフたちの黄昏)(上田久美子作・演出)で軍人のドミトリ・ロマンフ役を最後に退団(11月19日)した。15年間の男役生活から女優に転身、第一弾は2018年9月「マイ・フェア・レディ」のイライザである。宙組次期トップコンビは真風涼帆と星風まどかと発表された。

雪組トップコンビの早霧せいなと咲妃みゆは「幕末太陽傳」(小柳奈穂子作・演出)の居残り佐平次と女郎役を最後に揃って退団(7月23日)した。退団公演でこのような役を演じ

るのは珍しいが、早霧は軽やかにコメディエンヌぶりを発揮。女優としても18年6月「ウーマン・オブ・ザ・イヤール」で主演する。次の雪組トップコンビは望海風斗と真彩希帆。2017年の退団者は36人もいる。

小池修一郎が珠城りょうを中心とした新生月組のために浪漫活劇「All for One」(ダルトニアんと太陽王)を書き下ろした。デュマの名作「三銃士」をルイ13世統治下からルイ14世の時代に置き換え、ダルトニア(珠城)がルイ14世を守るために三銃士と共に闘う愛と勇気の冒険の物語にした。さらにルイ14世は双子でしかも女だったという設定で娘役トップ愛希れいかが演じた。

小池修一郎は1月「ロミオとジュリエット」の男女優版を振付、衣裳、美術を一新した新演出で上演(1月15日―2月14日、赤坂ACTシアター)したほか、井上芳雄主演「グレート・ギャツビー」、星組の「スカーレット・ピンバーネル」演出と超多忙の売れっ子作家である。

トップ交替が早まる中で花組の明日海りおがいつの間にかトップ中のトップの位置に立った。17年1月の東京宝塚劇場で、金色の砂漠(上田久美子作・演出)を主演、娘役トップの花乃まりあは千秋楽(2月5日)で退団したが、明日海は18年1月は宝塚大劇場で仙名彩世を相手役に、ボーの一族を主演。萩尾望都の傑作漫画を小池修一郎がミュージカ

ル化した。

首都圏拠点移動の劇団四季

劇団四季の拠点劇場「春」(秋)が6月25日に閉鎖された。JR東日本による再開発事業「竹芝ウオーターフロント開発計画」によるもので2020年に再開場する。「春」で上演中の「ライオンキング」は大井町の四季劇場「夏」に移動、12月に日本上演19周年を迎えた。KAT神奈川芸術劇場と提携、「オペラ座の怪人」(3月25日―8月13日)を上演、「ソング&ダンス」(10月5日―11月26日)は自由劇場で上演するなどやりくりが続く。次世代を担う子どもたちのためのファミリーミュージカル4作品(「王子とこじき」「エルコスの祈り」「ガンバの大冒険」「嵐の中の子どもたち」)は北海道から沖縄まで全国171都市で438公演を行ない、56万人の児童が観劇した。中国の四季歡歌文化芸術有限公司(北京市)とオリジナルミュージカル「人間になれた猫」のライセンス上演契約を締結。北京、上海で上演された。

ストリートブレイク「恋に落ちたシェイクスピア」を青木豪演出により18年6月から自由劇場で、ミュージカル「パリのアメリカ人」を19年1月から東急シアターオーブで上演すると発表した。18年夏、大井町にギャッツ・シアターを建設、「ギャッツ」を東京で9年ぶりに上演することも決まった。

2017年は東京、大阪、京都、名古屋、札幌、広島、福岡の拠点劇場と全国公演を含めて3097公演、320万人を動員、売り上げは前年比20億円増の221億円と好調だ。

活発なプロダクション制作

梅田芸術劇場は、宝塚OGに強い。歴代出演者を揃えた「エリザベートTAKARAZUKA 20周年スペシャル・ガラ・コンサート」(1月8日・20日・オーチャードホール)のほか湖月わたる、水夏希、蘭乃はならOGが大勢出演した「Pukuru」(謝珠栄構成・演出・振付 12月9日・16日 日本青年館ホール)、男女版「ロミオとジュリエット」(スカーレット・ピンバーネル)などを制作した。トップスター北翔海莉の女優スタートとなった「パジャマゲーム」(リチャード・ピッセル原作、ジョージ・アボット脚本、リチャード・アドラー、ジュリー・ロス作詞・作曲、トム・サザランド演出)を制作(9月25日・10月15日、日本青年館ホール)。パジャマ工場の質上げ騒動を描いたミュージカル・コメディ。北翔は労働組合のリーダーで新納慎也の工場長と対立するうちに恋に落ちる話。「滝沢歌舞伎」や「少年たち」を制作する松竹が「ローマで起こったおかしな出来事」をローマから江戸に置き換え「コメディ・トゥナイト」(3月4日・28日 新橋演舞場)と改題して上演。ローマ時代の奴隷が自由を求める話

が丁稚に変わり、しかも歌舞伎俳優の片岡愛之助主演とあって、サウンドハイム作詞・作曲の難曲もどこかに吹っ飛んだ。演出は宮本亜門。

マルセル・パニョルの「マリウス」と「ファニー」をもとにした音楽劇「マリウス」が、山田洋次脚本・演出によって上演された。父(柄本明)と息子(今井翼)の絆、マリウスの海へのあこがれ、ファニー(瀧本美織)との愛など、人生のほろ苦さが伝わった(3月6日・27日 日生劇場)

38年ぶりに音楽劇「にんじん」(ジュール・ルナール原作、山川啓介脚本・作詞、山本直純音楽、栗山民也演出)を大竹しのぶが主演した。60歳になった大竹がにんじん少年そのものになっていたのは驚きだった。(8月1日・27日 新橋演舞場)

偉大なる音痴と言われたフローレンス・フォスター・ジェンキンズを主人公にした「グロリアアス」を篠井英介が主演した。「ひめゆり」の「愛のうた」などのミュージカル座、「青空の休暇」「ゲゲゲの鬼太郎」などイッツフォーリーズの活躍も見逃せない。

360度客席が回転する新劇場ステージアラウンド東京が豊洲埠頭地区で3月30日にオープン。劇団☆新感線が代表作「懺悔城の七人」を「花・鳥・風・月」と銘打ち、出演者を入れ替えて18年2月まで上演した。

有楽町の「オルタナティブシアター」が開場

し、7月7日からサムライを主人公にした「アラタ」を上演した。外国人観光客をターゲットにしたノンバーバル(非言語)劇場だ。

来日公演も盛ん

海外からの来日公演は東急シアターオーブが一手に引き受けという感じだ。日本だけのためにアダム・クーパーが「シンギング・イン・ザ・レイン」(4月)を上演。水しぶきをあげて踊るダイナミックなダンスが見もの。レナード・バーンスタイン生誕100周年記念ワールドツアー「ウェスト・サイド・ストーリー」(7月)、米倉涼子も出演の「CHICAGO」(8月前半)、ディズニの名曲を用いた「ブラスト!」の「ミュージック・オブ・ディズニー」(8月後半)、「ピーター・パン」を生み出した劇作家バリを描いた「ファインディング・ネバーランド」(9月)、「天使にラブソングを」(10、11月)、「ブロードウェイ・クリスマス・ワンダーランド」(12月)とラッシュ状態。10年連続来日公演の「ドラマストラック」(8月 銀河劇場)は客席でドラムを叩けるのが人気だ。

ミュージカルベスト10

2017年のミュージカル界の傾向を知る上で、「ミュージカル」誌選出評論家・ジャーナリスト24名の「ミュージカルベスト

10」が参考になる。

作品ベスト10の第一位は「ベリリー・エリオット」リトル・ダンサー」に決まった。2005年にロンドンで初演されて以来、日本での上演が待ち望まれていた作品である。変声期前の少年が主役の上、歌、演技に高度なダンスが求められる。子役オーディションを経て1年がかりのレッスンの成果が第一位の評価につながった。TBS、ホリプロ、梅田芸術劇場、WOWOW製作。ステイヴン・ダルドリー演出。

第二位以下は「パレード」(ホリプロ 演出 森新太郎)「All for One」(ダルタニアスと太陽王」(宝塚歌劇団 演出 小池修一郎)「ビューティフル」(東宝 演出 マーク・ブルーニ)「にんじん」(松竹 演出 栗山民也)「神々の土地」(ロマノフたちの黄昏」(宝塚歌劇団 演出 上田久美子)「グレート・ギャツビー」(東宝 梅田芸術劇場 演出 小池修一郎)「紳士のための愛と殺人の手引

き」(東宝 ホリプロ 演出 寺崎秀臣)「ビッグ・フィッシュ」(東宝 演出 白井晃)「キューティ・ブロンド」(東宝 関西テレビ放送 演出 上田一豪)

再演賞「レ・ミゼラブル」(東宝 演出 ロレンス・コナー ジェームズ・パウエル)

演出家賞 小池修一郎(「All for One」)「グレート・ギャツビー」(「THE SCARLET PIMPERNEL」)「レディ・ベス」(他)

男優BEST10 第一位は「パレード」(スカレット・ピンパーネル)他の石丸幹二が選出された。第二位以下は市村正親(紳士のための愛と殺人の手引き)「屋根の上のヴァイオリン弾き」井上芳雄(「グレート・ギャツビー」)「ダディ・ロング・レッグズ」(他)ベリリー役の5人の子役たち(「ベリリー・エリオット」)加藤航世 木村咲哉 前田晴翔 未来和樹 山城力(山本耕史(メンフィス)川平慈英(「ビッグ・フィッシュ」)「フロッグとトート」)

中川晃教(「フランケンシュタイン」)「ビューティフル」(他)吉原光夫(「レ・ミゼラブル」)田代万里生(「きらめく星座」)「グレート・ギャツビー」第十位が3人。加藤和樹(「フランケンシュタイン」)「レディ・ベス」小池徹平(「デスノート」)「キャバレー」(屋良朝幸(「ドッグファイト」)

女優BEST10 第一位は「メンフィス」(「王家の紋章」)の濱田めぐみが選出された。第二位以下は大竹しのぶ(「にんじん」)島田歌穂(「ベリリー・エリオット」)神田沙也加(「キューティ・ブロンド」)「屋根の上のヴァイオリン弾き」平原綾香(「ビューティフル」)第六位が2人。珠城りょう(「All for One」)「グランドホテル」(他)花總まり(「レディ・ベス」)第八位が2人。早霧せいな(「幕末太陽傳」)「Dramatic」(北翔海莉(「パジャマゲーム」)第十位が鳳蘭(「屋根の上のヴァイオリン弾き」)

2017年・地方演劇

閉館相次いだ京都の小劇場

京都の演劇シーンに大きな役割を果たしていた京都市左京区下鴨のアトリエ劇研が二〇一七年八月末をもって閉館した。京都では一

六年末に東山区本町のスペース・イサンが貸し館業務を停止、ほかにも元・立誠小学校閉鎖などこの数年間に五つもの小劇場が姿を消し、関西演劇界に与えた波紋は大きい。「北

森 洋 三

の劇研、南のイサン」として親しまれていたアトリエ劇研は一九八四年にオープンした「アトリス・スペース無門館」が前身で、マキノゾミ主宰の劇団M.O.P.がここから巣立ち、

劇研と劇場名を改めた後も京都の各劇団の実験・創造的演劇やプロデュース公演を行ってきた小劇場の中核的存在だった。劇場としては最大百人くらいの収容能力だったが、年間で九七・九八%と高い稼働率を維持していた。オーナーの波多野茂彌館主が高齢になり土地建物を処分することになったための閉館という。ただ劇場を運営してきたNPO法人は場所を移して存続、二〇〇七年に誕生した劇研シニア劇団などの活動は継続されている。一方、九五年にオープンした「イサン」の閉鎖もやはり高齢になったオーナーの意向と

か。こうした事態に「アトリエ劇研」ディレクターあごうさとし、狂言師茂山あきらといった京都演劇人たちが一般社団法人アーツシード京都を設立。JR京都駅から徒歩十五分くらいの東九条に新劇場「シアターE9京都」を立ち上げるべく活動中だ。約百席の小劇場、ギャラリヤやカフェテラス、アーチスト宿泊設備も備えた総合施設を一八年秋の完成を目標に奔走している。

宮崎県立劇場「三文オペラ」上演へ

「年鑑2017」で報告した宮崎県立劇場のプレヒト作「三文オペラ」上演トラブル問題は解決の方向に向かった。同公演は一六年二月に時空の旅シリーズ最終公演として企画されたが上演権契約のトラブルで上演初日に中

止され、提携上演を予定していた神奈川芸術劇場、福島県いわきアリオス公演も中止になった。宮崎県立劇場では上演の復活を目指してドイツの著作権管理会社と「三文オペラ」は日本ではパブリック・ドメイン(著作権保護期間が過ぎ権利の消滅した著作物)であることを前提に粘り強く交渉した結果、和解が成立して上演可能になったという。一八年六月に同劇場で上演されることが発表された。

そんな中で宮崎県立劇場の「三文オペラ」復活公演に先立って神奈川芸術劇場が独自の企画で一八年一月二十三日から二月四日(二月十日・札幌市教育文化会館大ホールも)まで谷賢一上演台本・演出、松岡充、貴城けい、白井晃らのキャストで上演した。さらに二月十七・十八日、二十三・二十五日には劇団鳥の劇場(鳥取市)も鳥の劇場で上演するなど時ならぬ「三文オペラ」競演になった。

劇場法で活気づく公共劇場

民間劇場の不振は京都の小劇場や名古屋・中日劇場の閉館(一八年三月末)に象徴されているが、公立劇場では二〇一二(平成二十四)年公布・施行の「劇場法」(劇場・音楽堂等の活性化に関する法律)が実を結びつつあるようである。一般財団法人「地域創造」の助成も相まって公立劇場間の連携も目立つ。各劇場がそれぞれに多彩な活動を展開しているが岐阜県・可児市文化創造センター(衛紀生館長

兼芸術監督)を取り上げてみた。

同センターは〇八年から文学座、新日本フィルと「地域拠点契約」を結び、演劇では埋もれている現代劇をリメイクする「アーラ・コレクション・シリーズ」を一カ月の滞在型創造事業として柳美里作「向日葵の棺」上演を皮切りに一七年秋のシリーズ第十作「坂の上の家」まで精力的に取り組んでいる。地元公演にとどまらず、「坂の上の家」(松田正隆作、高橋正憲演出)では長野市芸術館アクトスペース、新潟県の長岡リリックホール・シアター、兵庫県の小野市うるおい交流館エクラ、福岡県のザザンクロス筑後(筑後市文化振興公社主催)、京都府の舞鶴市総合文化会館、東京の吉祥寺シアターなどへツアーも行った。可児市は岐阜県の中南部に位置する人口約十万人の小都市。同市の一般会計予算(二〇一五年度・二百八十六億円)の〇・一七%にあたる約四億八千万円を創造センターに充てている。ちなみに一般財団「芸術と創造」が文化庁の委託事業として作成した一六年七月の調査報告書「諸外国(六カ国)の文化予算に関する調査報告」によると文化予算が国家予算に占める割合が日本は〇・一〇%(二兆四十億円)、イギリスは〇・一五%(一兆七百七十三億円)、隣国の韓国は一・〇九%(二兆五百二十五億円)である。日本の文化予算の少なさはさておき、同創造センターにさいている予算をみると同市の文化振

興への意気込みが伝わってくる。このほかNHK「ラジオ深夜便」の朗読劇、能楽を含めた多彩なプロデュース公演を展開する新潟県のりゅうとびあ(新潟市民芸術文化会館)、パリ市立劇場との共同プロデュースによる山海塾公演を行っている福岡県の北九州芸術劇場などいまひとときわ地方演劇の活気が感じられる。

滞在型創造(AIR)活動

地方に滞在して創造活動するアーティスト・イン・レジデンス(AIR)も活発になってきた。欧米では長い歴史をもち、日本でも絵画や彫刻を中心に普及してきたが、演劇関連のAIRが近年目立つ。文学座と提携した可見市文化創造センターのように早くからスタートさせたところもあるが、一四年に兵庫県豊岡市が事業開始した城崎国際アートセンター(平田オリザ芸術監督)が規模や構想の大きさ、創設時に日本劇作家協会大会のメイン会場として豊岡大会を同センターで行ったこともあつて演劇界の脚光を浴びている。豊岡市は野生コウノトリ生息地、志賀直哉が滞在・執筆した城崎温泉で知られるが、ここも人口は約八万人の小都市である。会議・研修施設だった旧城崎大会議室をリノベーションして最大千人収容のホールのあるAIR施設に模様替え、六つのスタジオ、二十二人まで宿泊できるレジデンスなどを宿泊料、ホール・スタジオ使用料無料、二十四時間使用できる施

設を持つ。同市は「コウノトリの町」に加えて「アーティストのいるまち」(城崎から、世界へ発信)を主唱、芸術大学誘致にまで乗り出すなど市をあげてサポートしている。

AIRは各地で行われているが、「日本一の劇場づくり」を目指し、その幅広い活動が中部・近畿圏に大きな刺激を与えている三重県文化会館(公益財団法人・三重県文化振興事業団)を紹介してみたい。同文化会館のある津市は県庁所在地で人口は四日市市の三十一万人に次ぐ約二十七万人。全国で三十八番目(都道府県人口で三重県は二十二番目、約百八十万)の中都市で、劇場は大ホール(一九〇三席、中ホール(九六〇席)、小ホール(約三〇〇席)、ほかに同区画に多目的ホール(約四〇〇席)と充実している。「劇場法」は「見る」「聞く」だけでなく「創造する」「普及する」「育成する」など多様な劇場機能を求めているが、同会館のAIR「Mゲキ→ネクスト」は二週間・二十四時間使って新作をつくり小ホールでの公演、数回の交流プログラムを行なうという仕組み。自炊設備のある宿泊場所、舞台費五十万円、劇場までの往復旅費、劇場からの片道運搬費、現地宣伝費などは劇場側が負担、参加団体は文芸費、人件費を負担するほか公演の入場料収入は劇場側の収入となる。「Mゲキ→ネクスト」はこれまで柿食う客、第七劇場、ハイバイ、ままごと、サンプル、あおきりみかん、百景社、烏丸ストローク

ロック、野の上、iakku、FUKAIPRO DUCCE羽衣、このしたやみ、木ノ下歌舞伎、下鴨車窓、岡崎藝術座などが公募に応じて招聘されている。一七年度は平塚直隆が率いる名古屋の劇団オイスターズが招かれた。

同会館はこのほか全国的に活躍する若手劇団や若手の劇作家・演出家を招いて公演する「Mゲキセレクション」、地元で演劇人を育て疑似劇団活動を行なう「ミエ・ユース演劇ラボ」、戯曲を書き始めるためのアイデア、ヒントを練る「お試し戯曲講座」、「アートマネージメント人材育成講座」などを実施。また近隣の「津あけぼの座」との共同プロデュースや名店の料理と演劇を楽しむ「M→PAD」、三重大学との「実演芸術の振興等にかかわる連携」協定締結など豊富な内容で幅広く取り組んでいる。こうした創意工夫の背景に見逃せないのが人材の起用だ。公共施設の館長など運用の中心には地方公共団体からの「天下り」が多いが、同会館の梶吉宏館長はヤマハ在職時代に西ドイツで金管楽器マイスターの称号を取得、のちに音楽の友社取締役も務め、三重県知事の要請で就任した。また演劇関連では事業推進グループリーダーの松浦茂之氏は元銀行マン。三重県文化振興財団には県職員の出向がなくなり財団のプロパー職員で運営している。こうした人事面の柔軟さ、民間活用が大きな効果を上げているようなのである。同会館のAIR公募は東京の人気小劇場の

チラシ置き場に毎年見られたのだが、「Mゲキ・ネクス」は二〇一七年をもって終了した。同会館事業推進グループによると「公募が年々難しくなってきたため」という。毎年、十六、七劇団の応募があったとはいえ、運用運営のA・I・R効果が薄れてきたということなのだろう。A・I・Rの全国データベースを見ても個人参加の美術、舞踊が圧倒的に多く、やはり劇団招聘の難しさを物語っているように思える。

短編演劇祭劇王×神奈川かもめ短編演劇祭

二〇〇三年に日本劇作家協会東海支部と愛知県「長久手文化の家」が立ち上げた「劇王」は一年の第十回記念大会「劇王X 天下統一大会」でいったんは終了したが、一七年九月、四年ぶりに復活。全国各地の劇王と韓国・シンガポール・香港の三チームが長久手で競う形の「劇王XI」アジア大会として三日間で十二チームが参加して行われ、決勝進出チームを「救急車」呼びました（平塚直隆作・演出）で迎え撃った、東海支部長で第九代劇王の平塚が第十一代劇王の座を射止めた。一方、「劇王」を継承する形で一六年から始まったマグカル・フェス実行委員会、神奈川芸術劇場など共催の「第二回神奈川かもめ短編演劇祭」が横浜市の神奈川芸術劇場大スタジオで開かれ、韓国・台湾チームを交えた十二チームが競い、神奈川地区代表（小田原

市）のチリアクターズの「しらすのうちに」（大島寛史作・演出）が「かもめ賞」に輝いた。

演劇祭は相変わらず数多く開かれたが、隔年で開催される「全国シニア演劇大会」（NPO法人シニア演劇ネットワーク主催）が六月二、四日、福岡市・もちバレス大ホールで開催され、恍惚一座（大阪・吹田市）、劇団笑顔（青森市）など十二劇団が参加、かつこん党（福岡市）が十代で構成したジュニア審査員賞を受賞した。

地方劇団の功労者たちの計報が相次いだ。

一月十七日、劇団きづがわ（大阪市）創立メンバーの山本惣一郎が肝血栓で死去、七十五歳だった。八月十八日、劇団京芸（京都市）の元代表で俳優・演出家の藤沢薫が誤嚥性肺炎で死去、八十六歳。さらに岡崎演劇集団（愛知県岡崎市）の創立メンバー、代表の演出家・浅井克彦が九月十四日に多臓器不全で死去、八十六歳だった。

最後に各地に根を据えている劇団を中心に活動の一端をリポート。

「上半期」（一月十三〜十五日、劇団どろ（神戸市）がどろアトリエで、いつだって今だもん（谷川俊太郎作、立見瑛美演出）を、二十一・二十二日、劇団道化芝居（岐阜・可児市）が瑞穂市あじさいホールで「天国に行こう」（瀧端徹作・演出）を、二十六〜二十九日、木

ノ下歌舞伎（京都市）が京都・アトリエ劇研で「隅田川」（白神ももこ、杉原邦生、木ノ下裕一共同演出）「娘道成寺」（きたまり演出・振付）を上演。（二月）十一・十二日、劇団芝居屋かいとらんま（岐阜・大垣市）が瑞穂市サンシャインホールで「ジュリアーノとぼく」（後藤卓也作、蒙古斑演出）を、十一・十二日、B・L・U・K・S（広島市）が広島市南区民センターで「曲がれ！スプーン」（上田誠脚本、鍋木悟道演出）を、十九日、劇団すがお（三重・桑名市）が大山田コミュニティプラザで創立五十五周年記念公演「おやじの明日」（北泉優子作、石垣まさし演出）を上演。（三月）十一日、劇団レトルト内閣（大阪市）が近鉄アート館で「オフィス座の怪人」（脚本演出・三名刺繍）を、二十四〜二十六日、劇団名芸（名古屋）が平針小劇場で創立五十五周年記念公演「まほろば」（逢菜竜太作、柘輪司演出）を、二十四〜二十六日、劇団態変（大阪市）がHEP HALLで「ニライカナイ」の命の分水嶺（金満里作・演出）を上演。

（四月）三・四日、ギンギラ太陽、s（福岡市）が天神劇場で「天神ビッグ・バン！バン！パン！boom2」（大塚ムネット作・演出）を、十四〜十六日、関西芸術座（大阪市）がシアトリカル應典院で創立六十周年記念公演「徘徊（マリン）87歳の夏」（田中幸夫作、宮地仙舞台台本、藤田千代美演出）を上演。二十一〜二十三日、ドラマシアターどもIV（北海道・

江別市)がドラマシアターでもで「寿歌」(北村想作、ども演出)を。(五月)十四日、劇団静芸(静岡市)が静岡市民文化会館中ホールで「海と日傘」(松田正隆作、中川正臣演出)を、十七(二十九日、笑いの内閣(京都市)が京都・アトリエ劇研で日本・韓国・アメリカ編による「春のツレウヨまつり」(高間誓作・演出)を、二十六(三十一日、劇団老劇屋(大阪・枚方市)がHEP・HALLで「新しい生活の提案」(大熊隆太郎作・演出)をそれぞれ上演。(六月)二(四日、劇団大阪(大阪市)が谷町劇場で「walk in close」(横山拓也作、小原延之演出)を、三(四日、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)が岡崎市せきいホールで「流星に捧げる」(山田太一作、小森広貴演出)を上演。十六(十七日、劇団名古屋(名古屋)が熱田文化小劇場で創立六十周年記念公演「稲垣親切堂」堀川の畔にて」(吉村登作、久保田明演出)を上演。十六(十八日、二十三(二十五日、来年創立六十周年を迎える劇団未来(大阪市)が未来ワークスタジオで「ずぶ濡れのハト」(南出謙吾作、しまよしみち演出)を、二十五日、劇団やまなみ(山梨・北杜市)が笛吹市スコレーセンターで「ブンナよ、木からおいてこい」(水上勉原作、小松幹生脚本、雨宮豊演出)を。

「下半期」(七月)一・二日、演劇集団和歌山(和歌山市)が和歌の浦アートキューブで「煙が目にしみる」(堤泰之作、山入桂吾演出)

を、八・九日、劇団津演(三重・津市)が津リージョンプラザで「嫁も姑も皆幽霊」(池田政之作、竹守伸一演出)を。十四(十五日、劇団息吹(東大阪市)がイコラム・ホールで「ら・ら・ら」(太田善也作、坂手日登美演出)を、十四(十六日、劇団せすん(大阪市)が大坂グリーン会館で「もやしの唄」(小川未玲作、杉田満演出)を、二十一(二十四日、劇団大阪・豊麗線(大阪市)が谷町劇場で「日暮町風土記」(永井愛作、和田幸子演出)を上演。二十九(三十日、劇団すがお(三重・桑名市)が桑名市スター21で創立五十五周年公演「七十二年目の桑名空襲の日」(篠原史紀構成、石垣まさし演出)を。(八月)十八日、劇団きづがわ(大阪市)がリパティおおさかで「挽歌」(古川健作、林田時夫演出)を上演。(九月)三日、劇団弘演(弘前市)が銀河ホール(岩手県・西和賀町)で「かあちゃん」(山本周五郎原作、秋本博子脚本・演出)を上演。(九月)三日、劇団はぐるま(岐阜市)が長良川国際会議場メインホールで岐阜命名四百五十年記念音楽劇「岐阜から始まる天下布武」(浅野公蔵台本、なみ悟朗演出)を、九(十日、劇団名芸(名古屋)が名古屋市天白文化小劇場で創立六十周年記念のシェークスピア作「真夏の夜の夢」(近藤亜由美台本・演出)を、十六(十八日、劇団四紀会(神戸)が元町プチホールで「魔女の宅急便」キキのお仕事」(角野栄子原作、桜井敏脚色、岸本敏朗演出)、十六日、劇

団生活舞台(福岡市)がアクロス円形ホールで「暗い部屋」(平原義行作・演出)「どこかに生きながら」(小川未明作、平原義行演出)の二本立て上演。十六(十八日、関西芸術座(大阪市)がシアトリカル應院で創立六十周年記念公演のレイモンド・ブリッグズの絵本より「風が吹くとき」(高木達台本、亀井賢二演出)を。二十三(二十四日、劇団埼玉(埼玉・上尾市)がさいたま市プラザノースホールで「橙色の嘘」(平石耕一作、川村武夫演出)を。(十月)十(十一日、劇団支木(青森市)がアウガ多目的ホールで「ああ、青函連絡船」洞爺丸を知っていますか」(田辺典忠作・演出)を、十四(十五日(二十八(二十九日)劇団からつかぜ(浜松市)がアトリエで「蠅取り紙」山田家の五人兄妹」(飯島早苗、鈴木裕美作、平井新演出)を上演。(十一月)二(六日、劇団iak(大阪市)が大坂ウイングフィールドで「ハイツブリが飛ぶのを」(横山拓也作、上田一軒演出)を、十(十六日、劇団きさら(熊本市)がギヤラリーキムラ(十二月)九(十日、福岡市ゆめアール大橋もで「ブーイング」(池田美樹作・演出)を上演。十七(十九日、劇団大阪(大阪市)が一心寺シアター倶楽で「ここにライオンはいない」(伊地知克介作、熊本一演出)を、十八日、劇団だいこん座(山形・鶴岡市)が鶴岡市民ホールで「ザ・シェルトー」(北村想作、石川富志夫演出)を。十八(十九日、劇団弘演(弘前市)が弘前文化

センターホールで「闇に咲く花」(井上ひさし作、秋本博子演出)を、二十四・二十六、十二月一・三日、劇団未来(大阪市)が未来ワークスタジオで「静かな海へ」MINAMATA(ふたくちつよし作、森本景文演出)を、二十五・二十六日、劇団名古屋(名古屋)が名古屋市港文化小劇場で創立六十周年記念公演「あ・り・が・と」(麻創けい子作、久保田明演出)を、二十五・二十六日、十二月一・三日、劇団四紀会(神戸市)が元町プチシアターで創立六十周年記念公演「王将」(北條秀司作、桜井敏構成、岸本敏朗演出)を上演。(十二月一・三日、八・十日、劇団かすがい(兵庫・尼崎市)がコミュニティシアターAQ

で「もやしの唄」(小川未玲作、一堂和緒演出)、二・三日、劇団ドリームチョップ(金沢市)が金沢市民芸術村ドラマ工房でかなざわリージョナルシアター2017参加公演「底のない柄杓」(井口時次郎作・演出)を、二・三日、劇団すがお(桑名市)が桑名市大山田コミュニティプラザで創立五十五周年記念「海原をこえて」消えた赤須賀船」(国分正明作、石垣まさし演出)を、三・五日、劇団静芸(静岡市)がアトリエ公演「父と暮らせば」(井上ひさし作、長谷川哲夫演出)を、八・十日、劇団はぐるま(岐阜市)が岐阜市文化センター小劇場で「夜空の下に降る花は」(いずみ凜作、汲田正子演出)。九・十日、劇団オイスターズ

(名古屋)が三重県文化会館小ホール(二十五・二十四日・駒場アゴラ劇場)で「君のそれはなんだ」(平塚直隆作・演出)を上演。十五・十六日、劇団山形(山形市)が山形市中央公民館アズセ七日町で「あしたのニュース」(鈴木聡作、平野礼子演出)を、十六・十七日、劇団どろろ(神戸市)がどろろアトリエで「空の村号」(篠原久美子作、合田幸平演出)を、十八・十九日、劇団よこはま宅座(横浜)が横浜美術館レクチャーホールで「偷盗」(山本周五郎原作、梨地四郎脚色、濱田重行演出)を、十五・十七日、劇団演劇関係いす校舎(福岡県行橋市)が自宅劇場・守田ん家で「あくたもくた」(守田慎之介作・演出)をそれぞれ上演。

二〇一七年・テレビドラマの回顧

勢いづくTBS、「陸王」もヒット

TBSテレビは二〇一六年、「逃げるは恥だが役に立つ」(逃げ恥)でヒットを飛ばした。「東京ドラマアウォード2017」では連続ドラマ部門のグランプリに輝いたをはじめ、新垣結衣が主演女優賞、那須田淳がプロデュース賞、金子文紀が演出賞(カルテット)なども対象、主題歌の「恋」も歌った星野源が主題歌賞を受け、賞を総なめした。「逃げ恥」は日本民間放送連盟賞テレビドラマ番

組最優秀や放送文化基金賞奨励賞にも選ばれた。TBSは一七年も余勢を駆って「陸王」などをヒットさせ、勢いが目立った。

「日曜劇場」で十二月に放送された「陸王」は、大ヒット作の「半沢直樹」や「ルーズヴェルト・ゲーム」「下町ロケット」に続いて、池井戸潤の小説を脚本・八津弘幸、演出・福澤克雄コンビがドラマ化した。足袋を製造する老舗の四代目社長(役所広司)が、会社の存続をかけてランニングシューズの開発

鈴木 嘉 一

に取り組む。融資を渋る銀行や大手スポーツ用品メーカーとの闘いなど、山あり谷ありの展開で飽きさせない。「小」が「大」に挑み、最後には苦勞が報われる物語は、地道に働く者への応援歌でもある。視聴率は拡大版の一回目が一四・七%(ビデオリサーチ調べ、関東地区、以下同じ)と好発進し、最終回は二〇・五%に跳ね上がった。タイムシフト(録画の再生)視聴率は一三・一%と高く、リアルタイム視聴率と足した総合視聴率(重複を除く)

は三〇・三％に達した。最終回で視聴率が二〇％、総合視聴率が三〇％を超えるのは「逃げ恥」と同じパターンだった。

「陸王」が成功した理由の一つには、キャストイングの妙もある。寺尾聰やビエル瀧、若手の竹内涼真や山崎賢人に加えて、歌舞伎俳優の市川右團次、エッセイストの阿川佐和子、元プロテニス選手の松岡修造を重要な役で起用した。駅伝やマラソン大会のシーンでは、数多くのエキストラを動員し、臨場感やスケール感の大きさを見せつけた福澤の演出も光った。

TBSの「火曜ドラマ」(火曜夜十時)は「逃げ恥」のヒットで脚光を浴びた。漫画のドラマ化が多いこの枠で一、三月に放送された「カルテット」は異色だった。坂元裕二の脚本は長野・軽井沢を舞台にして、弦楽四重奏を奏でる四人の男女(松たか子、満島ひかり、高橋一生、松田龍平)の関係とその行方を独特のタッチで描いた。それぞれの過去や心の傷を明らかにしながらも、サスペンスドラマには傾斜せず、生きることの意味をさりげなく問いかけた。ギャラクシー賞優秀賞や東京ドラマアウォード優秀賞を受けるなど、高く評価された。

漫画の原作に戻ったこの後の「あなたのことはそれほど」(いくえみ綾原作)は、清潔感のある波瑠が不倫の妻を演じた。夫役の東出昌大が異常なまでの猜疑心や屈折した愛を表

現し、話題を呼んだ。ヒロインの「ライト感」の不倫は物議を醸したが、浮気相手の妻を演じた仲里依紗の逆襲は女性の怖さを見せつけた。

十、十二月放送の「監獄のお姫さま」も、宮藤官九郎が「おばちゃん犯罪エンターテインメント」に挑むというキャッチフレーズで話題を集めた。女性刑務所で知り合った五人が仲間の冤罪を晴らすため、イケメンの社長を懲らしめる物語。主演の小泉今日子、満島ひかり、菅野美穂、夏帆、坂井真紀、森下愛子という多彩な女優陣に加え、伊勢谷友介、塚本高史が共演した。意表をつく人物設定や展開、現代感覚あふれる会話、コミカルな「小ネタ」を身上とする宮藤の脚本は世代が異なる私たちの群像劇の様相を呈し、新たな境地を開拓した。

明暗が分かれた朝ドラと大河ドラマ

NHKの朝の連続テレビ小説(朝ドラ)と大河ドラマは、視聴率でまた明暗が分かれた。一七年も朝ドラの好調は続き、年間の高視聴率番組ベスト30のうちドラマは六本を数えたが、このうち三本は朝ドラだった。

一六年度後期の「べっぴんさん」(渡辺千穂脚本)は、神戸市を拠点とする子供服中心のアパレルメーカー創業者の一人をモデルとし、芳根京子が主演した。平均視聴率は二〇・三％で、三作続けて二〇％台を保った。

企業の創業者など実在の人物をモデルとする路線が続くなか、一七年度前期の「ひよっこ」は異色作だろう。高度成長期の一九六〇年代を背景にして、茨城県の農家に生まれたみね子(有村架純)が集団就職で上京し、成長する姿を描いた。東京に出稼ぎに行っていた父親(沢村一樹)が記憶喪失で行方不明になる以外は、取り立てて言うほどの事は起こらない。岡田恵和の脚本は、農家の暮らしや就職先での寮生活、みね子が転職する赤坂の洋食店の人々(宮本信子、佐々木蔵之介ら)との触れ合い、大学生(竹内涼真)との恋愛などをきめ細かく描き、多くの共感を集めた。

みね子の心の内を表現するモノローグや、増田明美のナレーションも新鮮だった。マラソン解説者としての増田の視点も打ち出され、「おや、朝ドラ名物の立ち聞きですね」というように、ドラマを批評しながら楽しむ視聴者の視線も盛り込まれた。何かを成し遂げた人物より、どこにでもいそうな普通の人々にエールを送るのは、岡田らしかった。

初回が一九・五％でスタートした視聴率は、評判の広がりとともに少しずつ上昇し、最高時は二四・四％に跳ね上がった。平均視聴率も二〇・四％と、二〇％台をキープした。一七年度後期の「わろてんか」(吉田智子脚本)は、吉本興業の創業者・吉本せいをモデルにした。大阪放送局が制作する朝ドラは、三作続けて実在の女性実業家を主人公に据え

た。ヒロインのてんには新人の葵わかなが起用され、その周囲を夫役の松坂桃李、両親役の遠藤憲一と鈴木保奈美、鈴木京香、高橋一生、広瀬アリスらが固めている。視聴率は二〇%前後で推移し、今や朝ドラの人気は安定している。

これに対し、大河ドラマの「おんな城主直虎」は、初回の一六・九%が最高となり、苦戦を強いられた。一二・八%の平均視聴率は、歴代最低を記録した二年の「平清盛」と一五年の「花燃ゆ」の二一・〇%に次いで低かった。

柴咲コウが演じた井伊直虎は、ご当地の静岡県浜松市でも知る人がまれて、「なぜ今、直虎なのか」とわかりにくかった。時代背景は二年続けた戦国時代となり、「真田丸」で徳川家康を好演した内野聖陽の残像がアせないうち、家康役で阿部サダヲが登場するのも違和感があった。駿河の今川氏や甲斐の武田氏といった強大な勢力に囲まれた井伊家が、どう領地を守り、乱世を生き延びるか。この展開は「真田丸」の前半と重なり、既視感を覚えた。

その一方、森下佳子^{（注）}の脚本は戦の場面を最小限にとどめ、代わりに直虎と領民の関係を丁寧に描いた。「民百姓が安んじて暮らせる土地であれば、井伊家の再興などどうでも良い」というせりふには、作品のテーマが込められていた。ヒロインの相手役として、初恋の人だった井伊直親（三浦春馬）、複雑な愛憎劇を繰り広げた小野政次（高橋一生）、架空の

人物である盗賊の頭・龍雲丸（柳楽優弥）へとバトンが渡されたラブストーリーの側面もあり、大河ドラマを敬遠していた女性層の一部を引きつけたかもしれない。

しかし、大河ドラマは歴史上の人物や史実に現代を重ねて、時代と人間のかかわりをダイナミックに描く歴史ドラマ路線を継承することで、独自の地位を保ってきた。直虎の行動範囲はほぼ井伊谷に限られ、登場人物も出来事も郷土史のようで、ちまちましているのは否めなかった。

「大河ファンタジー」と銘打った上橋菜穂子原作の「精霊の守り人」のシーズン2（全九話）が一月から、最終章（全九話）が十一月から放送された。アジアとおぼしき架空の国々を舞台にして、女用心棒バルサの活躍を4Kの画像と壮大なスケールで描いた。最終章の見せ場は、映画「シン・ゴジラ」の樋口真嗣監督を演出陣に迎え、VFX（視覚効果）技術を駆使した戦のシーンだった。主演の綾瀬はるか^{（注）}は三年がかりのシリーズで見事なアクションを披露し、一回りも二回りも大きくなった。日本テレビで主演した「奥様は、取り扱い注意」では、元特殊工作員の専業主婦として悪人たちを小気味よく退治した。

NHKではこのほか、波瑠と斉藤由貴が母娘を演じた「お母さん、娘をやめていいですか？」（井上由美子脚本）や、上方出身の主人公（黒木華）が江戸の料理人として成長してい

く「みをつくし料理帖」、朗読教室という一見地味な世界を取り上げた竹野内豊主演の「この声をきみに」（大森美香脚本）などが好評だった。

目立った医療ドラマと警察もの

連続ドラマで最も視聴率が高かったのは、テレビ朝日の「ドクターX 外科医・大門未知子」（十・十二月）の最終回（二五・三%）で、総合視聴率は三五・二%を記録した。この第五シリーズでは、主演の米倉涼子、西田敏行、岸部一徳らのレギュラー陣に、草刈正雄、永山絢斗、陣内孝則らが新たに加わり、パワーを維持した。十六シリーズを迎えた水谷豊主演の「相棒」もそうだが、テレビ朝日の「定番路線」の人気は根強い。この影響かどうか、民放では医療と警察を題材にした連続ドラマが目立った。

TBSの「日曜劇場」では、木村拓哉がアメリカ帰りの敏腕外科医を演じた「A LIFE E〜愛しき人〜」（一・三月）、長谷川博己がふんする刑事が警視庁から所轄署に左遷され、本庁の捜査一課長（香川照之）らと対決する「小さな巨人」（四・六月）も好視聴率を挙げた。警察の内部抗争や出世競争、上層部との衝突に力点が置かれ、「半沢直樹」の警察版とも言える「小さな巨人」のように、警察を舞台にしている。「相棒」に代表されるおなじみの刑事ドラマとは趣が異なる作品も相次いだ。

テレビ朝日の「緊急取調室」(四〜六月)は井上由美子脚本、天海祐希主演の続編。警察の取調室という密室で、刑事と容疑者との息詰まる攻防劇を心理サスペンスふうに描いた。同時期にフジテレビ系で放送された関西テレビ制作の「CRISIS 公安機動捜査隊特捜班」は、直木賞作家金城一紀の原案・脚本によつて、特殊任務の刑事(小栗旬 西島秀俊ら)がテロ組織と闘う姿を迫力あるアクションで見せた。

七月には、テレビ朝日の「刑事7人」と「遺留捜査」、フジテレビの「警視庁いきもの係」、テレビ東京の「警視庁ゼロ係」が始まり、警察ものが乱立した。このクールでは、フジテレビの「コード・ブルー〜ドクターヘリ緊急救命〜」(安達奈緒子脚本)が人気を集めた。七年ぶりに復活したシリーズの三作目では、山下智久、新垣結衣、戸田恵梨香がふんするフライトドクターが若手を指導する立場になる。救命の現場や院内の描写は緊迫感に富み、若い医師や看護師の群像劇としても見応えがあった。低迷が続いている「月九」(月曜夜九時)では、久々のヒット作となった。

TBSの「コウノドリ」(十〜十二月)は産科医療の現場を描く続編で、前作に引き続き綾野剛が主演した。この脚本に参加した矢島弘一は劇団「東京マハロ」を主宰し、初めてテレビドラマを執筆したTBSの深夜ドラマ「毒島ゆり子のせきさら日記」で向田邦子賞を受

賞した。

日本テレビは好調な「水曜ドラマ」(水曜夜十時)を中心にして、独自の路線を行く。吉高由里子主演の「東京タラレバ娘」(一〜三月)はアラサー女子たちの恋と仕事を描くラブコメディで、同世代の女性層に支持された。この後の「母になる」はうって変わって、若い息子を誘拐された母親(沢尻エリカ)を主人公に据えた。事件から九年後に戻ってきた息子との関係をとおして、「母親になる」とはどういうことかをシリアスに問いかけた。

「水曜ドラマ」で七月から放送された「過保護のカホコ」は「究極の箱入り娘」の学生・加穂子(高畑充希)が対照的な境遇の大学生(竹内涼真)と出会い、精神的に自立していく姿をユーモラスに描いた。「女王の教室」や「家政婦のミタ」でヒットを飛ばした脚本家の遊川和彦が新境地を開き、高畑の好演も光った。民放の深夜ドラマでは、テレビ東京の「ドラマ24」などから異色作が生まれた。「バイプレイヤーズ」もしも6人の名脇役がシェアハウスで暮らしたら〜は遠藤憲一、大杉漣、光石研、田口モロヲ、寺島進、松重豊が本人役で出演した。「山田孝之のカンヌ映画祭」も「山田孝之の東京都北区赤羽」(一五年)に続いて山田が本人役で登場し、カンヌ国際映画祭をめざして映画製作を模索する。山下敦弘監督も顔を出し、ドラマともドキュメンタリーともつかないような独特の作りが注目

を集めた。

テレビ朝日が「帯ドラマ劇場」を新設

「昼ドラ」と言えば、一六年三月に東海テレビ(フジテレビ系)のドラマ枠が幕を閉じ、民放から姿を消した。テレビ朝日は一七年四月、シルバー世代向けに「帯ドラマ劇場」を新設し、第一作として倉本聰脚本の「やすらぎの郷」を半年間にわたり放送した。テレビ界で功績のあつた者だけが無償で入居できる老人ホームを舞台にして、引退した脚本家や往年のスター女優、大物歌手らが繰り広げる騒動をコミカルに描いた。認知症や終活、老人の恋愛など現代の高齢者が抱える問題だけではなく、倉本自身のテレビ批判もさりげなく盛り込んだ。

八十二歳の倉本は「年寄りが見やすい時間帯に面白いドラマがない。ゴールデンタイムに対してシルバータイトムを作ろう」と、自ら企画を持ち込んだ。主演の石坂浩二をはじめ浅丘ルリ子、八千草薫、有馬稲子、加賀まりこ、五月みどりらの豪華な配役も、大きな話題を集めた。倉本は旧知の仲の出演者を想定し、「あて書き」をした。主題歌は中島みゆきが歌った。元女優の覆面作家を演じた野際陽子が放送中の六月に八十一歳で死去したが、早めに収録を終えていたため、その後も「出演」し続けた。五・八%の平均視聴率はこの時間帯では上々と言える。

「やすらぎの郷」に出演した清野菜名は、この後の「トットちゃん」でヒロイン役に抜擢された。テレビの草創期から活躍してきた黒柳徹子の半生をつづる大石静の脚本は、バイオリニストの父・黒柳守綱（山本耕史）と母親の朝（松下奈緒）との出会い、戦時下にもかかわらず自由な校風を貫いたトモエ学園が徹子に与えた影響を丁寧に描いた。戦後は、テレビの急成長とともに人気者になっていく姿だけでなく、フランス在住の音楽家との知られざる恋のエピソードも明らかにされた。

竹中直人、高橋克典、里見浩太朗、小澤征悦らの共演陣も豪華な印象を与え、主題歌は福山雅治が歌った。これは十月十二月の放送だったので、今後の放送期間は三か月単位になりそうだ。

一方、「土ワイ」の略称で親しまれたテレビ朝日の「土曜ワイド劇場」が終了した。これは「二時間ドラマの元祖」と言われるが、一九七七年の開始時は一時間半の「テレビファイチャー」（長編テレビ映画）として放送された。第一作は、渥美清が田舎の刑事にふんずる早坂暁脚本の「時間よ、とまれ」文化庁芸術祭優秀賞）だった。二年後、二時間枠に拡大され、サスペンスドラマが主流になった。初期の代表作は、天知茂が名探偵の明智小五郎を演じた「江戸川乱歩の美女」シリーズだった。市原悦子主演の「家政婦は見た！」と「西村京太郎トラベルミステリー」の両シリーズ

も代表作に挙げられる。

「土曜ワイド劇場」の成功によって、日本テレビが八一年に「火曜サスペンス劇場」を始めるなど、二時間ドラマ枠は各局に編み込まれた。九〇年のピーク時には民放四局で週に八本が乱立したが、二〇〇五年に「火曜サスペンス劇場」が終了してからは撤退が相次いだ。テレビ朝日の二時間ドラマ枠としては日曜の午前に「日曜ワイド」が新設され、「土ワイ」の人気シリーズなどが放送されている。また、TBSの「月曜名作劇場」は一月、中高年層がより見やすい時間帯にと、放送開始時間が夜九時から一時間繰り上げられた。ここでも西村京太郎原作の「十津川警部シリーズ」の人気が高い。しかし、どこも定番のサスペンス路線ばかりでは、飽きられるのも無理はないだろう。

動画配信サービスなどのコラボ進む

社会派エンターテインメント路線を柱とするWOWOWの「連続ドラマW」は一七年も、水準の高い作品を送り出した。堂場瞬一原作、三上博史主演の「社長室の冬」巨大新聞社を獲る男」、池井戸潤の原作を向井理、斎藤工のダブル主演でドラマ化した「アキラとあきら」、性同一性障害を取り上げた東野圭吾原作、中谷美紀主演の「片想い」、外務省の闇を照らした清武英利のノンフィクションを原作として、佐藤浩市、江口洋介、北村一輝

らが出演した「石つぶてゝ外務省機密費を暴いた捜査二課の男たち」などだ。

WOWOWはメディアを横断するコラボレーションの企画にも力を入れた。

二月には、日本テレビとその系列の動画配信サービス「Hulu」と共同制作した鈴木亮平主演の「銭形警部」を放送・配信した。四月からは、東海テレビと共同制作した玉山鉄二主演の「犯罪症候群」をフジテレビ系で八回放送した後、谷原章介主演の続編をWOWOWで四回放送した。さらに、カンヌ国際映画祭に出品された黒沢清監督の「散歩する侵略者」のスピノフ版として、黒沢が自ら撮った連続ドラマ「予兆 散歩する侵略者」も放送した。

時代劇専門チャンネルを運営する日本映画放送は引き続き、スカパーノと組んでオリジナルの時代劇を制作した。作家藤沢周平の没後二十年という節目に際し、藤沢の短編集「橋ものがたり」の中から三編をドラマ化した。一作目の「小さな橋」は松雪泰子が主演し、日本映画放送社長でもある杉田成道が自ら監督を務めた。同じ藤沢の原作で、仲代達矢主演、杉田監督の「果し合い」は「ニューヨーク・フェスティバル」の単発ドラマ部門で金賞に輝いた。

定額制で見放題の動画配信サービス各社も競争が激化し、オリジナルのコンテンツ作りに乗り出している。

又吉直樹の芥川賞受賞作を連続ドラマ化した

た「火花」は一六年、米国系の動画配信サービス「ネットフリックス」で配信され、一七年二月からはNHKで全十話が放送された。「放送と通信の融合時代にふさわしい高品質なコンテンツの制作とメディア展開」が評価され、ギャラクシー賞の「フロンティア賞」を受賞した。これに続いて、全日本テレビ番組製作社連盟(ATP)が主催するATP賞テレビグランプリでも特別賞を受けた。米国系の「Amazonプライム・ビデオ」で配信された水川あさみ主演の連続ドラマ「東京女子図鑑」も、この特別賞に選ばれた。

芸術祭大賞は「眩く北斎の娘」

単発ドラマやミニシリーズでは、NHKで九月十八日に放送された大森美香脚本、加藤拓演出の「眩く北斎の娘」が芸術祭大賞に輝いた。宮崎あおいが葛飾北斎(長塚京三)の三女・お栄にふんし、浮世絵の巨人を陰で支えるだけではなく、偉大な父親との葛藤、自身も独自の画風を深める姿を描いた。完成度が高く、浮世絵の工房を綿密に再現した美術陣の仕事も見事だった。芸術祭優秀賞には、池端俊策の脚本を柴田岳志が演出したNHKの「夏目漱石の妻」、子供への虐待をテーマにして、篠原涼子が対照的な二役を演じた読売テレビの「愛を乞うひと」、柴咲コウが主演した朝日放送の「水の轍」が選ばれた。

テレビ東京の「破獄」は、「昭和の脱獄王」の

実話に基づく吉村昭の原作を池端脚本、深川栄洋演出でドラマ化した。太平洋戦争中、囚人の人権はないに等しく、網走刑務所では厳冬期も薄着を強いられた。二度脱獄した佐久間(山田孝之)は、思いがけない手口と驚異的な身体能力で脱獄を図る。老練な看守長(ビートたけし)との息詰まる攻防と心理戦では、たけしの圧倒的な存在感に伍して、山田の体当たりの演技が称賛に値する。この秀作は東京ドラマアウォードで単発ドラマ部門のグランプリを受賞した。また、池端は「放送人の会」主催の第十六回「放送人グランプリ」で脚本家では初めてグランプリを受けた。テレビ東京の「琥珀」も見応えがあった。浅田次郎原作、西田敏行主演のスペシャルドラマの五作目では、西田が定年間近の刑事にふんし、未解決事件との関連で富山の港町を訪れる。追う者と追われる者の心理劇を寺尾聰、鈴木京香との共演で描いた。この脚本を書いた岡田恵和は、オリジナルでテレビ朝日の「最後の同窓会」も作った。テレビ東京の連続ドラマ「ユニバーサル広告社」あなたの人生、売り込みます!」も手がけ、この年も活躍が目立った。

スペシャルドラマでは、NHKが三月に「絆く連れ奇跡の子馬」を二夜連続で放送した。東日本大震災で被災した福島県南相馬市の「相馬野馬追」を題材にして、役所広司、田中裕子、新垣結衣らが被災地の「心の復興」を

表現した。日本テレビの八月恒例の「24時間テレビ」で放送された「時代をつくった男 阿久悠物語」は、亀梨和也と松下奈緒が夫婦役を演じ、一七年のドラマでは最高となる二五・六%の視聴率を挙げた。脚本・橋田壽賀子と石井ふく子プロデューサーの名コンビによるTBSの「渡る世間は鬼ばかり」シリーズは、三時間スペシャルが九月に放送された。

テレビ朝日が三月、二夜連続で放送した「そして誰もいなくなった」は、アガサ・クリステイの傑作を日本に置き換えた。仲間由紀恵、津川雅彦、橋爪功、柳葉敏郎、沢村一樹、向井理、大地真央らとともに、元判事役で渡瀬恒彦(七十二歳)も出演し、これが遺作となった。

NHK大河ドラマ「勝海舟」やテレビ朝日の「名奉行 遠山の金さん」などで活躍した松方弘樹(七十四歳)、NHKの「天下御免」・夢千代日記「花へんろ 風の昭和日記」などの秀作で知られる脚本家の早坂暁(八十八歳)も世を去った。